

DNAから導きだされる日本人の起源

日本人の起源について、DNAと云う新技術が教えてくれる新しい事実を、今までに蓄えられてきた歴史・考古学・民俗学などの知識で裏打ちしながら、新しい発想で解明してゆきます。

初稿 2012年4月11日

丸地三郎

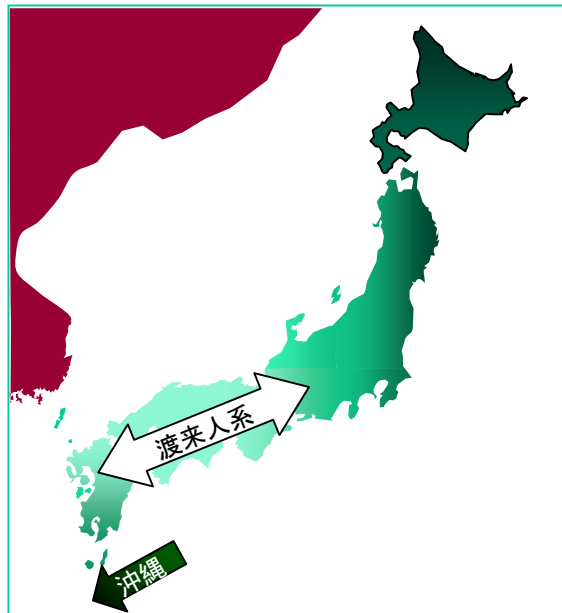
歴史の探求にも、“独創性”と“革新性”と“普遍性”が望まれます。

目次

- タイトル
 - 初めに
 - 従来の日本人起源論
- 探求にあたって知っておきたい基本知識
 - ヒトの起源を調べる方法の種類
 - ヒトのDNA、方法は一種類ではない。
 - 同じDNA、発見！ 何が言えるか？
 - カギとなる事象と論文: DNA
 - 同上 : ウィルスの感染ルート
 - 気候と海面の高さ
 - 現在の地図と違う常識
 - 人類誕生から現代人まで
 - 新人・出アフリカ (ベースとなる時期と事象)
- 新人移動のルート
 - 7-5万年前 出アフリカ
 - 7-5万年前 出アフリカ -2
 - アジアへのルート → 北ルートは有り得ない
 - 5~3万年前 第2波の出アフリカ
 - 3万5千~3万年前 スンダ大陸から北上
 - 3万5千~3万年前 その②
 - 縄文人の遺伝子・父母・Y染色体・mtDNAと大陸・バイカル湖まで到着した人々のDNAの模式
- 3万~2万年前 厳寒期
- 2万~1万年前 やや暖化した時期
- 1万年前~5千年前 その①
- 1万年前~5千年前 その② 稲作の発祥と伝播
- 6~4千年前 激動の時代
- 3600年前 太平洋では
- 2900年~2100年前 東アジアでは
 - 渡来人のDNA
 - 徐福一行・渡来人の3種のDNA
 - 渡来人の3種のDNAの解釈
 - 弥生時代を切り開いた渡来人一行
- 言語の分布図と人類の移動ルート/DNA(男女)
 - 世界の言語: 語順による分布図
 - 言語の分布図と人類の移動ルート/DNA(男女)
 - 分布図と移動ルートから読み取れること
- まとめ

従来の日本人起源論

- 二重構造モデル
 - 「日本人の起源」中橋孝博著・「日本人の誕生」埴原和郎著などに代表される起源論で、早期に日本に移り住んでいた縄文人と、その後、大陸から渡来した弥生人の2種類の日本人が起源とされている。



- ルーツはバイカル湖周辺
 - は何処から来たか」血液型遺伝子から解く松本秀雄著・「日本人の起源」神話からDNA科学「日本人へ崎谷満著などに代表される起源論で、アフリカを出てすぐに中央アジアからバイカル湖沿岸に移住した北方ルートの現生人がシベリアから北海道又は、韓国から九州を経て日本に移る。



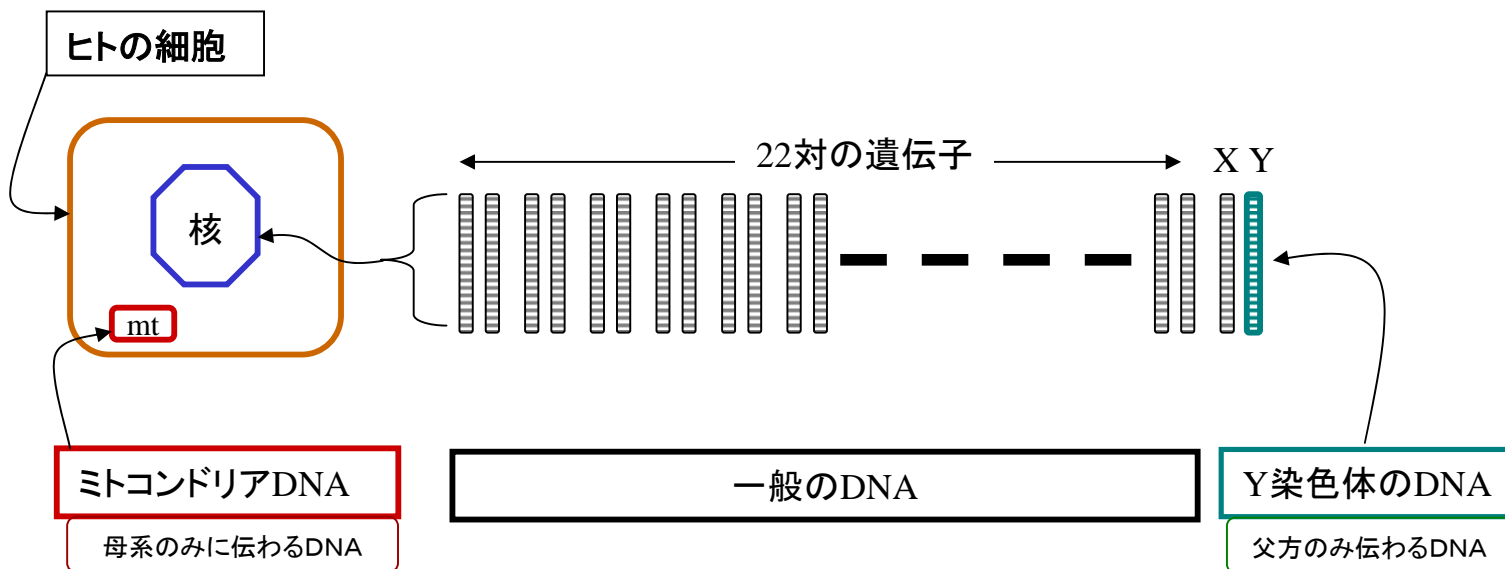
二重構造モデルの日本人の起源に対して、最新のDNA解析の結果を持って、日本人北方ルート説が唱えられ、従来の研究成果が否定されている。併し、なんとも納得の行かない、疑問の多い論議になっている。

ヒトの起源を調べる方法の種類

- ヒトのルーツを解析するために、従来から使われてきた方法論がある。
 - 石器、青銅器、鉄器
 - 土器、食器、道具
 - 民俗学、民族学
 - 伝承、神話
 - 言語、記述された歴史
 - 骨、歯、身体的特徴
- 新たに使われる医学・科学ベースの方法論
 - 放射性元素による絶対年代の測定
 - ヒトのDNA
 - 病原菌・ウィルスの羅病
 - 家畜等のDNA
- 医学・科学ベースの方法論により、正確な事実が判明してきたことは、大いに歓迎する。併し、その断片的な事実を、従来の方法論で調査されて明らかになった事実と、論理的な整合性のない説が散見される。新論旨と整合性の取れない従来の手法を頭から否定するのは戴けない。
- これから展開する論旨は、従来からの方法論・事実をつなぎ、DNAなど医学・科学ベースの方法論が導き出した、ワクワクする新しい事実から、日本人の起源と日本語の起源に迫る。
- 発想の新しさを大切にして、独創性・革新性を持ち、歴史的事実や貴重な研究成果との普遍性をもった起源論としたい。

ヒトのDNAで、起源を調べるために有効な方法は一種類ではない。

- ヒトの起源の調査に有効なDNAには、次の3種類ある。



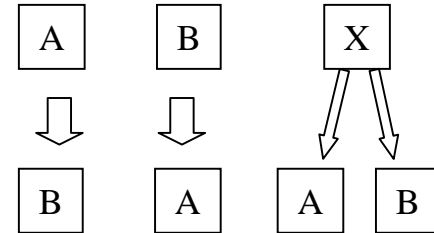
- 3種類のDNAとは：
 - 一般のDNA :「父と母のDNA」(遺伝子情報の大多数はこのDNA)
 - 人と民族の形質に最も影響の大きい。
 - Y染色体のDNA :「父方にのみ伝わる特殊なDNA」
 - ミトコンドリアDNA(mtDNA) :「母系のみ伝わる特殊なDNA」
(ミトコンドリアは、細胞内で共生している別組織)(人と民族の形質に与える影響は少ない)
- 種類のDNAの1つのみを捉えて、ヒトの起源を論じても片手落ちで、3種類のDNAから示される全ての事実を整合したものが真実となる。

同じDNAを発見！ それで何が言えるか？

- DNAの解析から判明した事実から、ヒトの起源について、何が言えるのか？

- 地点AとBで同じタイプの遺伝子が見つかった場合

- AからB又は、BからAへと、断定してはいけない。
- 別の地点からAとBへ移動する場合もある。
- 3通りの解の内の正解を見つけるには、外の手掛かりが不可欠。
- 間違っていると断定すると、原因と結果が逆になる。



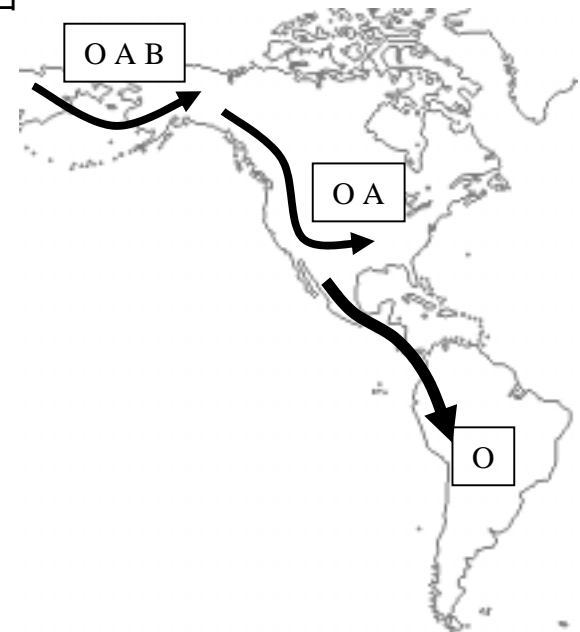
- あるDNAグループの比率が、地域によって減少・拡大する場合
二つの全く反対な傾向が見られるので、断定は出来ない。

- * 移動に伴い多様性が失われるケース

- 南北アメリカの原住民の血液型の例・右図
 - 中込弥男「ヒトの遺伝」に記載

- * 移動に伴い、他民族と混血して行くケース

- 中心が純粋で周辺が混血度合いが大きい



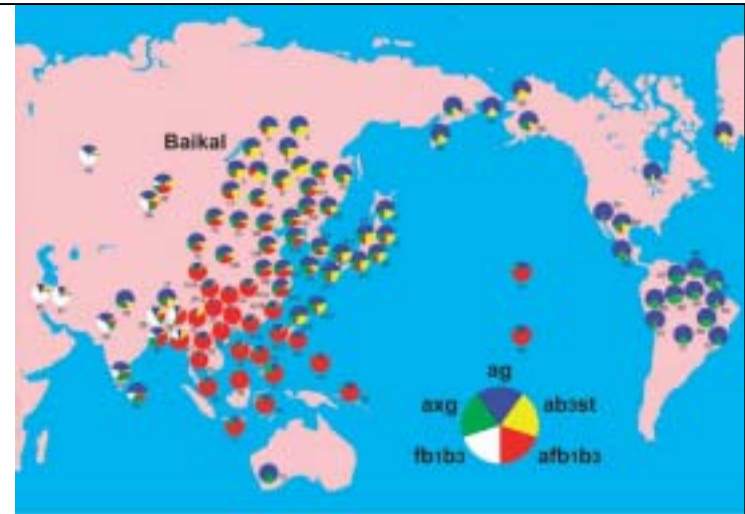
カギとなる事象と論文:DNA

● 一般DNAに相当するDNA遺伝子

- 世界のモンゴロイド、130集団についての調査結果
免疫グロブリンG(Gm)の標識遺伝子の分布
- 大阪医科大学名誉教授の松本秀雄博士の論文
- 右の図（オーストラリアのアボリジニが説明付かない）

● Y染色体DNA

- 世界中で、ほぼ日本人だけに見られる型のDNAが3系統ある
 - アイヌ人の85%、日本人全体の38%はD2
 - アイヌ人の0%、日本人全体の21%はO2b1
(O2b1はY2型と以前は呼ばれていた)
 - アイヌ人の0%、日本人全体の5%はO3
- 日本人の30%(上記の数値とは相違)と韓国人の10%に見つかるY2といわれる型は、その他の地域では発見できないが台湾で65人中8人で見つかった。その8人の内3人は名前を「陳」という。(中堀豊著、Y染色体からみた日本人から)
 - ・ この「陳」と言う家系は、黄河の南の地域に起源を持つという。
 - ・ 歴史を辿れる家族名を持つ「陳」一族と日本人の関係を説明できる起源論が望まれる。

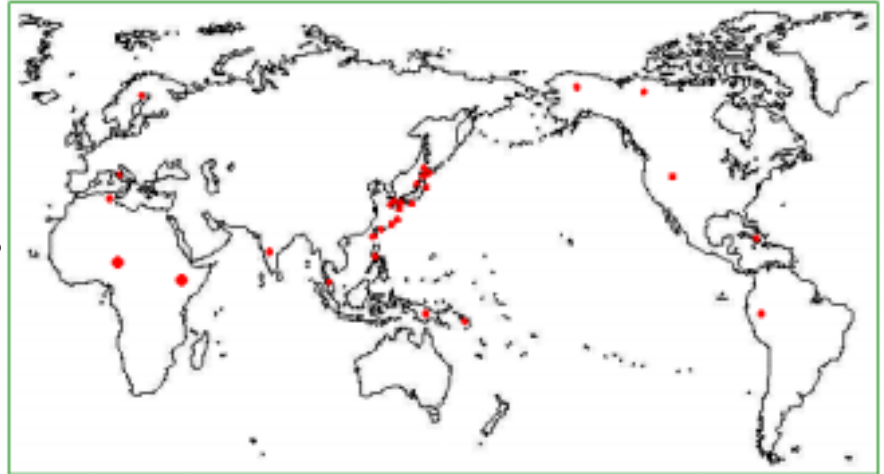


● ミトコンドリアDNA (mtDNA)

- 1 篠田謙一と金井理の分析や、最新の篠田の著書によると、茨城県の中妻遺跡から発掘された縄文人骨のmtDNA からM10遺伝子が検出された。その遺伝子と同一の遺伝子を、バイカル地域に住んでいるブリアートが持っている。
 - 2 1986年春、アメリカのフロリダで発見されたミイラ化したヒト(アメリカ・インディアン)の脳細胞からえたミトコンドリアDNAを解析したところ、日本人5人と共通するタイプの配列だったことが明らかになった。(モンゴロイドの地球3の第4章から)
 - 3 埼玉県浦和で発掘された縄文人と推察される頭骨からミトコンドリアDNAを解析した処、マレー人とインドネシア人と一致した。(モンゴロイドの地球3の第4章から)
- いずれも、同じ母系であることを示している。

カギとなる事象と論文: ウイルスの感染ルート

- DNA遺伝子以外にも、人の遺伝と同じように、子々孫々に伝わって感染してきたウイルスがある。このウイルスの感染ルートは、家族内だけ、つまり母子間と夫婦間に限定されている。
- このウイルスはATLウイルスと云い、白血病を引き起こす。中公新書「新ウイルス物語」日沼頼夫著に記されている。
 - このウイルスのキャリア(感染経験者)は沖縄(琉球人)で33.9%、北海道のアイヌで45.2%で多く見られ、九州が7.8%とやや多く、四国—本州では1%未満のところが多く、東北では1%となっている。その外に、九州の宮崎県・鹿児島県・長崎県の離島海岸地域、四国・隠岐・紀伊半島南端・東北の飛島・牡鹿半島・山陸海岸などの僻地に多く発見された。
 - 日沼氏は、現地調査を行い、非常に古くから居住し、人の混血の機会の少なかった、離島や半島先端などと沖縄・九州・北海道に、キャリアが発生していることから、日本の先住民がこのキャリアを持ち、その後、日本に、移り住んだ人が混血すると、キャリアにはならないことを示した。
- 世界的な調査が行われ、このウイルスのキャリアは、右の図の赤マークの地点で発見されている。
- HTLV-1は中央アフリカから人類の進化拡大に伴って、縄文人や南米アンデスの先住民などに伝えられたと想像されている。(東嶋和子著「死因事典」p132)
- 尚、韓国・朝鮮及び中国ではキャリアが発見されない。台湾の先住民にもキャリアは居ない。台湾のキャリアは日本人の移住者と思われる。東南アジアはまったくゼロではないが、キャリアはほぼ発見されない。
- PS: 沖縄ではこのキャリアが多いがその中で宮古島には、このキャリアは極端に少ない。「宮古島の人は、沖縄の他の島と違って、日本先住民ではないからだろう。」と日沼氏は記している。このことは、非常に興味深い。宮古島のこと: 大野晋氏のタミル語と日本語の記述に、宮古の言葉が引用され、古くからタミルと同じ日本語が使われてきたことを示している。このことが、沖縄・琉球人が日本古来の人でありながら、何故、渡来人の日本語を使ったのか疑問に思っていたが、宮古島が古来からの琉球人とは異なる人が住む島であったことが判り、沖縄・琉球人≠タミル語を使う人と判明し、長年の疑問がここで解消された。



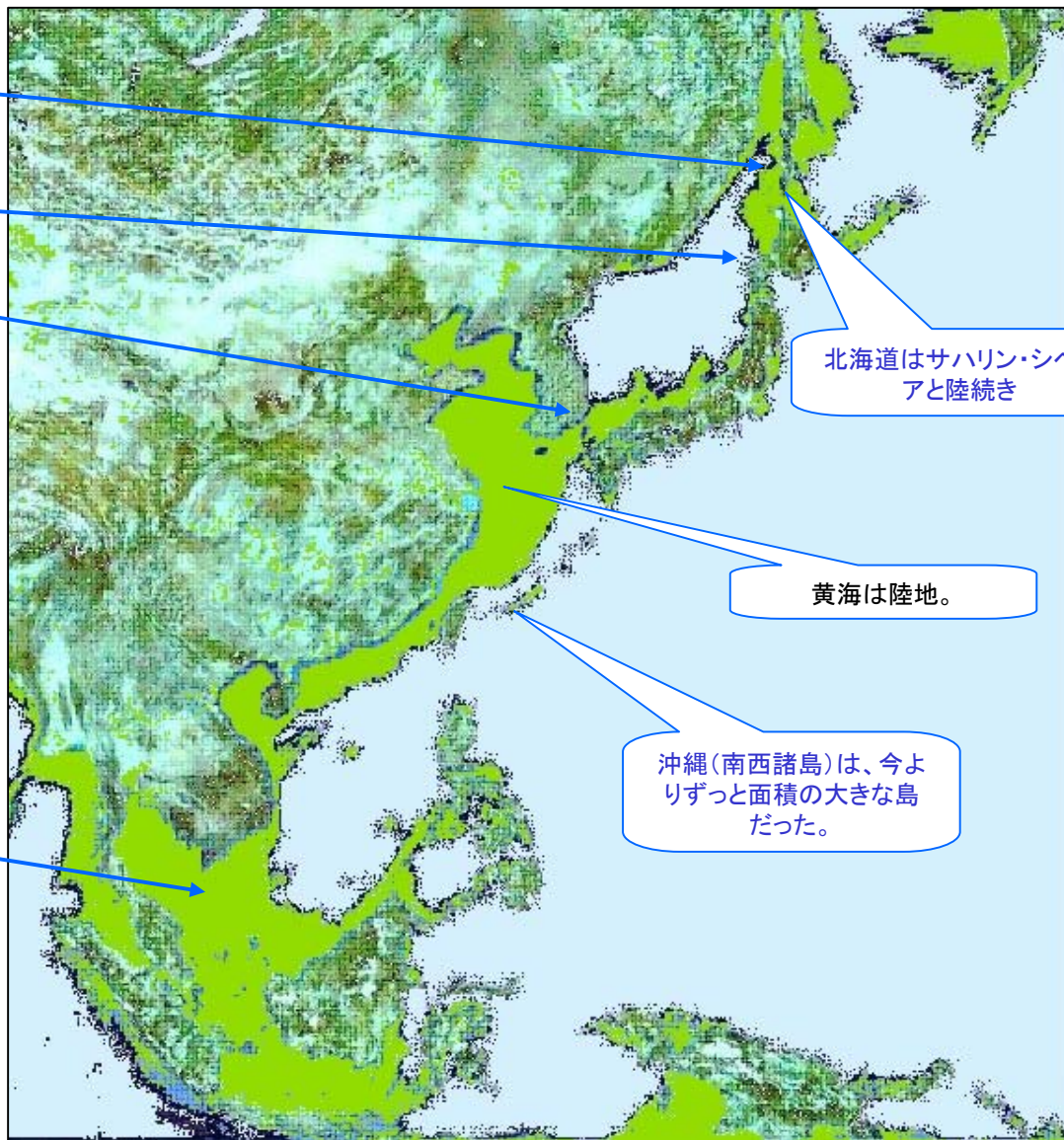
新人類がアフリカを出発し、全世界に広まった10万年前から1万年前の時期のことを考える時は、
気候と海面の高さを考慮。

宗谷海峡の最深部は
60mで陸続に

津軽海峡の最深部は
140mで海峡のまま

対馬海峡の最深部は
90～100mで、2万年前
近辺で一時的に陸続き
の時があった

マレーシア・インドネ
シアー帯は陸地で、
スンダ大陸
と呼ばれ、アジア人
(モンゴロイド) 揺籃の
地となった。



北海道はサハリン・シベ
リアと陸続き

黄海は陸地。

沖縄(南西諸島)は、今よ
りずっと面積の大きな島
だった。



気候と海面の高さの変化を考慮すると、現在の地図と違う常識が現れる。

- 黄海は陸地。
 - 安定した食料確保の面から、海沿いの移動は有利。
 - 海岸沿いに移動すると、沖縄・西南諸島は、現在よりずっと近い距離にある。
- 沖縄(南西諸島)は、今よりずっと面積の大きな島だった。
 - 現在の島嶼部分は山で、その周辺に広い陸地が広がっていた。
 - 食物確保など人口包容力は大きかった。
 - 海岸近くの住居・墓地は、海面上昇後には、海面上に。
- 対馬海峡の最深部は90～100mで一時的に陸続きの時があった。
 - 陸続きの時期は、誰でも渡れた。
 - それ以外の時期には、対馬海峡の横断は海洋民族・船舶の技術を持った限られた民族のみが渡れた。
- 津軽海峡の最深部は140mで海峡のまま。
 - 津軽海峡は、北の海で、更に困難な渡海となった。
- 宗谷海峡の最深部は60mで陸続きに。サハリン・シベリアとは陸続きだった。
 - 一度、津軽海峡を越えることができた民族にとっては、北海道から樺太(サハリン)、陸続きのシベリヤ沿海部までは、一体の地域だった。



人類誕生から現代人まで

- 人類の誕生は500万年前といわれる。
 - 300万年前の有名なルーシーと呼ばれる完全な人類化石が東アフリカの大地溝帯で発見された。
 - いくつかの系統の人類が発生し・生存し、化石を残し、滅んでいる
- 原人の世界への拡大
 - 150万年前に大地溝帯で原人が誕生し、100～50万年前にアフリカを出て世界に広がった。ジャワ原人、北京原人。
 - 旧人とも呼ばれるネアンデルタール人がヨーロッパへ進出したのは、50万年前。
- 新人
 - 現代の世界人口70億人の人類は、20万年前にアフリカで誕生し、一人の女性の女性の子孫と云われる。ミトコンドリアDNAの解析から証明されている。
- 人類は、猿、類人猿から別れ、500万年前に誕生し、2足歩行、言語、道具を得て進化。幾つかの身体的違いを持った系統に分れ進化を遂げ、世界に拡散した。厳しい気候の変化や生存競争などにより、最終的には、20万年前に発生した新人が世界中に広がり、70億人にまで拡大した。
- 今回のDNAから導きだされる日本人の起源では、このアフリカで20万年前に誕生した新人までの起源を遡る。

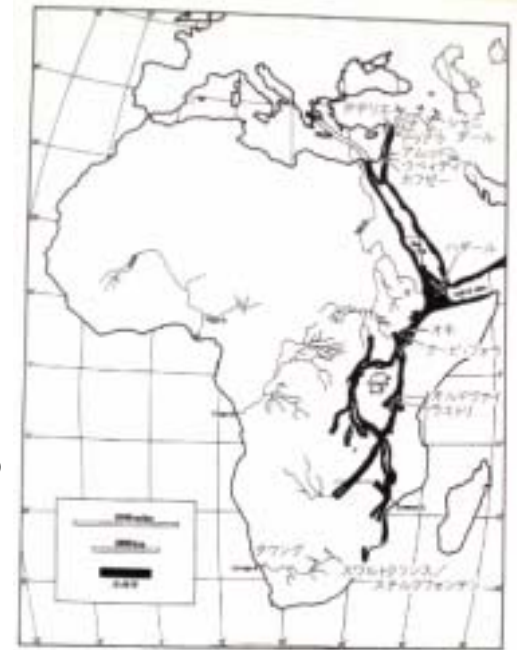


図4. 大地溝帯と紅海地溝帯

新人・出アフリカ（ベースとなる時期と事象）

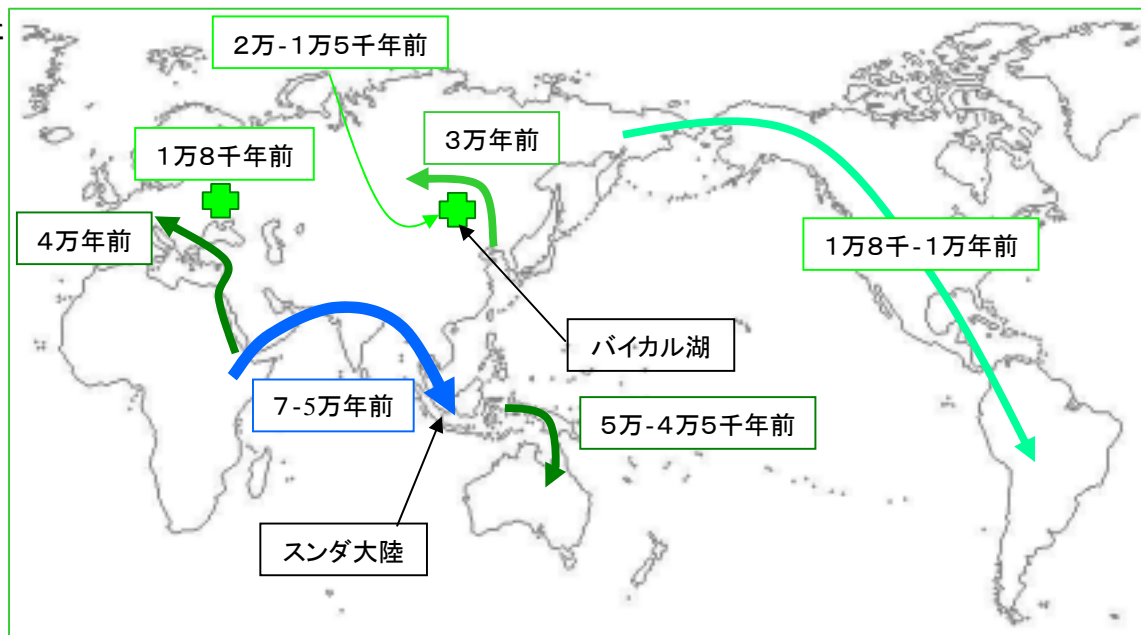
現生人類の歴史を辿る前に、判明している基本的な事実の時期と場所を明確にしておきたい。

（ネアンデルタール人などの旧人のことは除外します）

- 現代のホモ・サピエンス(新人)は20万年前にアフリカで進化した。
- 7万から5万年前にアフリカから外へ移住し開始、結局ヨーロッパとアジアで既存のヒト属と置き換わった。
- ヨーロッパへの侵出開始は、4万年前以降とされている。
- ウクライナのマンモスの骨で作られた

住居で有名なメジリチ遺跡の年代は、放射性炭素法で1万8000年前と測定されています。

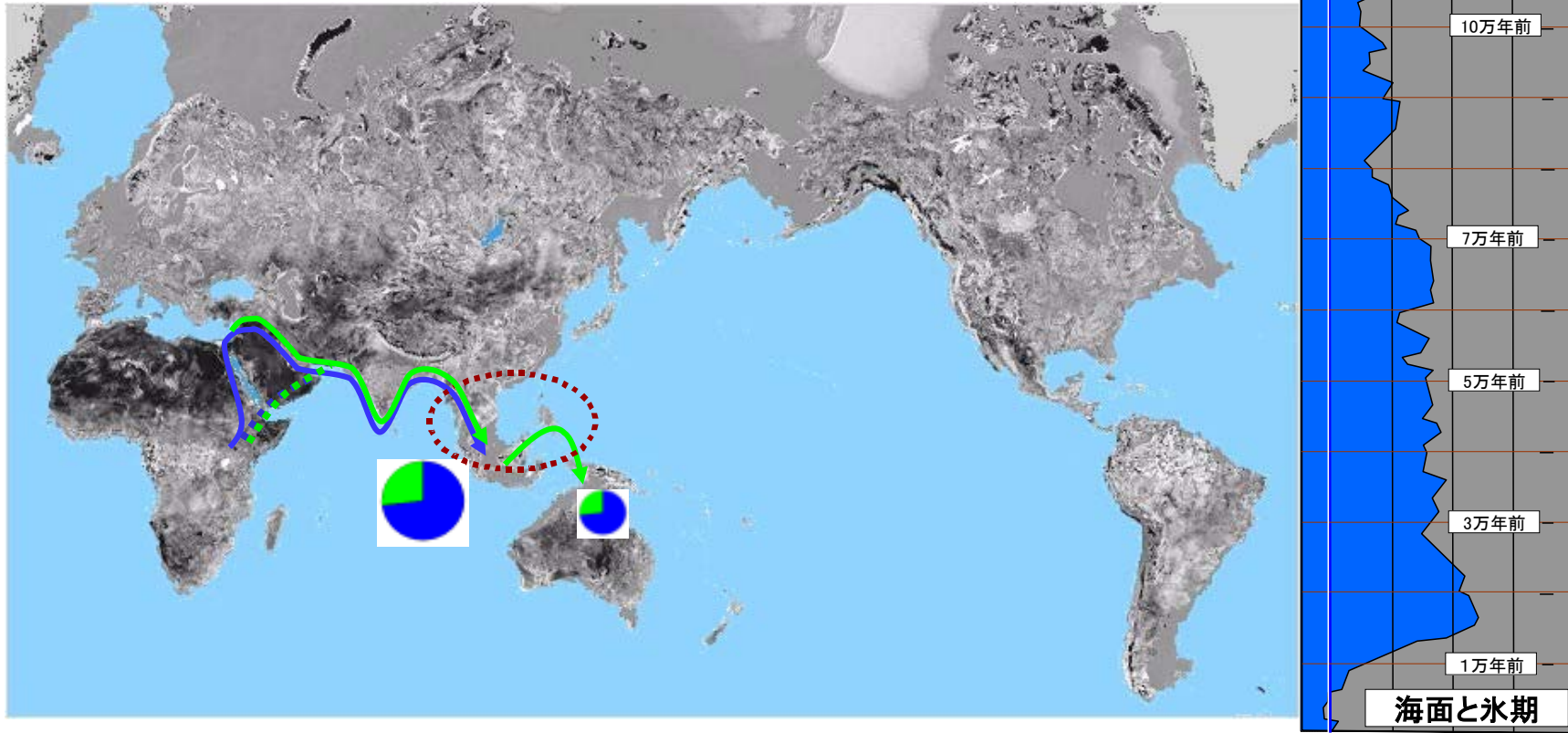
- スンダ大陸からオーストラリアへの移動は5万年～4万5千年前。
- 3万年前、モンゴロイドがシベリアに移住。
- 2万年前～1万5千年前、厳寒期への適応現象が起きた。
（バイカル湖周辺）
- シベリア大陸から南北アメリカへの移住は1万8千年～1万年前。



- 出アフリカを果たした新人の置かれた状況: 揺籃の地・地溝帯は、四季を通じて(一年中)食物が採集できる地で、温暖な地だった。出アフリカは、道々の、日々の食料確保が問題で、移動中の気温の変化への対応も、生き延びるために不可欠な条件だった。新人達のもって出た道具箱の中身が、生存お条件となった。寒く食料の採取できない冬を越えることは、出アフリカと移動の最も基本的な条件。ヨーロッパへの進出が4万年前以降となった最大の理由は越冬の難しさと云われる。考慮が必要な事は、7万年前から1万年前までの期間は氷河期だった事。移動と越冬が難しい時期であったこと。

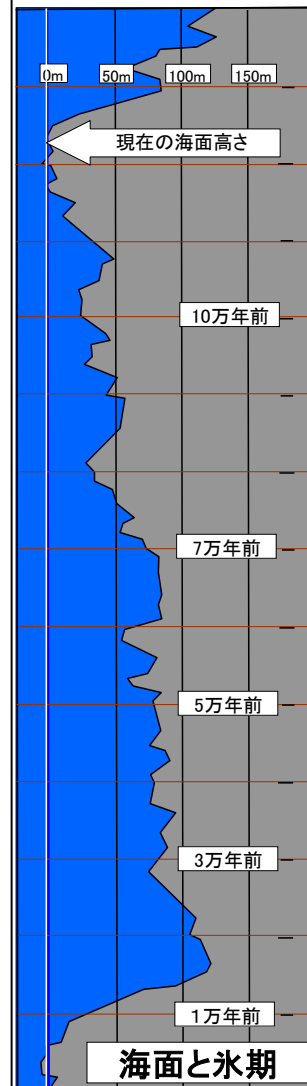
7-5万年前 出アフリカ

- 20万年前にアフリカ地溝帯に誕生した。四季を通じて食料の採集ができ、寒さに凍えることのない恵まれた地で世代を重ねた
- 7-5万年前、新人は、アフリカ地溝帯を出て、アラビア半島、イラン、インドを通り、スンダ大陸に渡った。
 - スンダ大陸は、氷河期で海面が下がったために、マレーシア、インドネシア、フィリピンが陸続になって形作られた大陸。赤道直下であり、氷河期でも温かく、雨も降り、四季を通じて食料採取が可能な地域で、アジア人(モンゴロイド)揺籃の地となった。



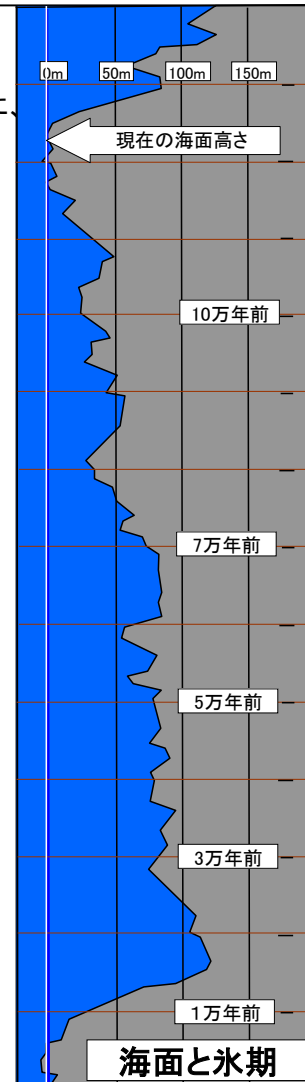
7-5万年前 出アフリカ -2

- 初期人類は、優れたハンターで肉食人？
 - 人類の食生活を、大きく誤解してきた。
 - 地道な民族考古学の研究から判明していること、初期人類は、必要とする日々のエネルギーを植物資源に依存していた。必要とするエネルギーを、日常的に動物資源から確保することは困難だった。
 - はるかに装備の良い現代の狩猟採集民族でさえ、植物資源が主たるエネルギー源となっている。
 - 後の時代になって、例外的にイヌイットなどの極北民族は優れたハンターで肉食の食生活をしているが。
- 20年前に新人が誕生したアフリカ地溝帯
 - アフリカ地溝帯を出た新人は、10万年前には、北上し、死海地溝帯にいたった。この地溝帯は食用植物の品種が豊富で、収穫シーズンがバラけており、年間を通じて食料確保が可能だった。この地で、世代を重ね、進化をして、石器などの道具を改良していった。
 - 一般的には、4万年前以降の改良された石器として発掘されるオーリナシアンタイプの石器が、死海地溝帯で発掘されるものの年代は10万年前とされている。年代から、拡散する前には、死海地溝帯に居たことが分る。
 - この地から、新人は移住を開始したものと推察する。
- 7-5万年
 - 新人は、地溝帯を出て、東へ移動したグループは、インドを通り、スンダ大陸に渡った。
 - スンダ大陸は、氷河期で海面が下がったために、マレーシア、インドネシア、フィリピンが陸続になって形作られた大陸で、赤道直下にあり、氷河期でも温かく、雨も降り、四季を通じて食料採取が可能な地域で、アジア人(モンゴロイド)揺籃の地となった。
 - 5万~4万5千年前前に、このスンダ大陸からサフル大陸(ニューギニア、オーストラリア、タスマニア島などが氷河期に陸続きになって構成されたもの)に、アボリジニー(移住したとの遺跡(52,000年前))が残っている。
 - この移住は、スンダ大陸とサフル大陸が陸続きになったことがないため、舟を使った渡海の技術を、この時期の人達が既に持っていたことを示している。
 - このアボリジニーの免疫グロブリンG(Gm)の標識遺伝子調べた結果が、**ag**と**axg**の混合となっている。このことから、サフル大陸に移住した時期にスンダ大陸に居た人達は、同じ**Gm**遺伝子をもっていたものと推察する。
 - したがって、最初にスンダ大陸に移住してきたのは、**ag**、**axg**の遺伝子を持った、2波の移住があったものと推察する。(死海地溝帯を出た時に既に、2遺伝子の混血であった可能性もある。)
 - 北と西に移動したグループは、あったかも知れないが、痕跡を残しておらず、4万年前のヨーロッパ進出までない。その理由は、10万年前以降、寒さを増した氷河期で、食料確保と寒さで、生存が困難だったものと推察する。
 - 特に、イラン高原、アフガニスタン、タジキスタン、キルギスから北側中央シベリア高原までは氷河期には、十分な装備を持たない、出アフリカの新人には、移住するには、余りにも困難な地域と思われることを特に喚起しておく。



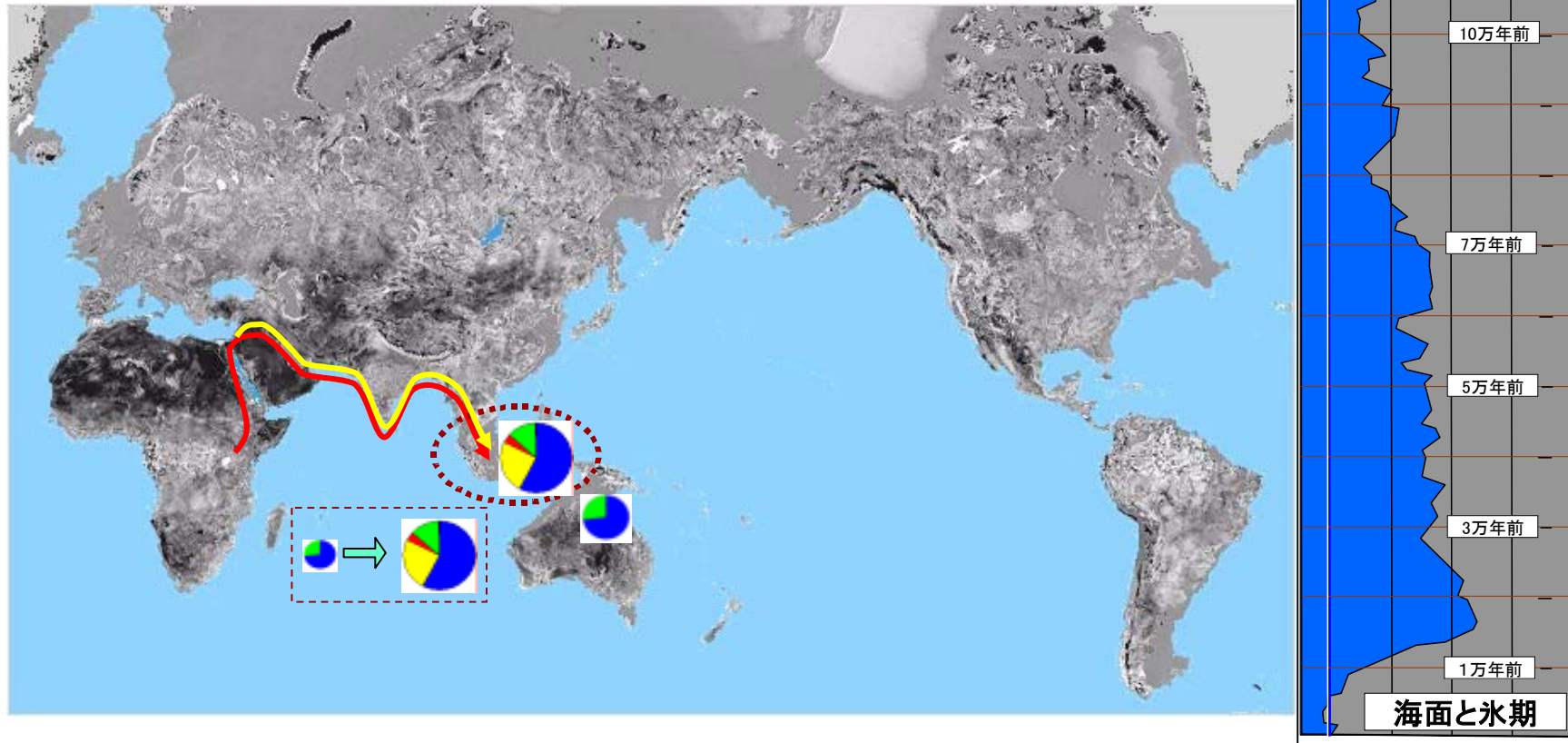
アジアへのルート → 北ルートは有り得ない

- 下の写真は氷河期の写真ではありません。2011年2月2日の衛星NOAAの写真です。(デイリーメール紙)。氷河期ではもっと白く覆われた部分が多く、寒さは厳しかったものと推察されます。
- アフリカ地溝帯と言う、温かく、四季を通じて豊かな食料を採集できる環境に居た新人が、出アフリカ直後に、5万年前(氷河期)に、氷に閉ざされた山岳地帯のイラン高原、ヒンズークシ山脈、天山山脈、アルタイ山脈を越えてバイカル湖にたどり着くのは、無理な話です。保存食もなく、防寒具もなく、大型動物を狩る道具もなく、氷河に閉ざされた数千kmの旅をすることは、出アフリカ後の人類には、無理。
又、厳しい寒さのシベリア、バイカル湖は、家族を連れ、新天地を目指す人類にとって、移動目的地とする理由はない。
- 従って、出アフリカを果たした新人類が北上しシベリア・バイカル湖に達したという説は、成り立たない。
若し、この説を成り立たせる場合には、食料、防寒具、氷河地帯を越える装備、大型動物(マンモス等)などを狩る道具と技術の問題をクリアする必要がある。




5～3万年前 第2波の出アフリカ

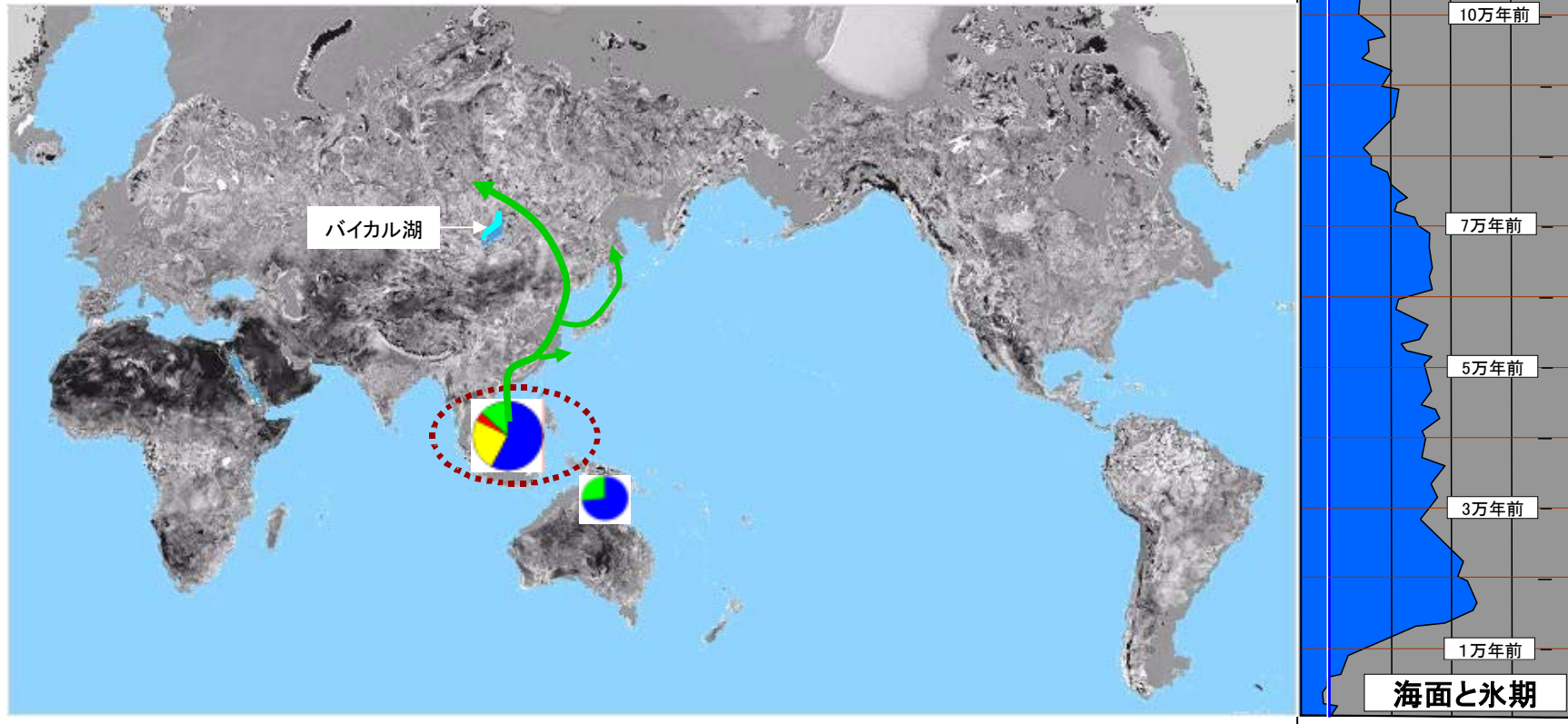
- アフリカ及び死海地溝帯から、更に移住の新しい波が、3次4次と続いたものと推察。
 - 必ずしもアフリカからではなく、途中の地域で進化・変化した人類が、移住した可能性もある。
- スンダ大陸では
 - グロブリンG(Gm)の標識遺伝子afb1b3とab3stを持つ人が移住。
 - agとaxgの前2波の人達との混血が進んだ。
 - この🌐の人を初期型モンゴロイドと仮に呼ぶ



3万5千～3万年前 スンダ大陸から北上

- 凡そ3万年前、スンダ大陸から新人類は北上開始

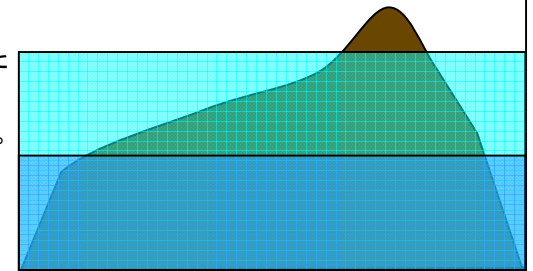
- グロブリンG(Gm)の標識遺伝子agとaxg、afb1b3とab3stを持つ  初期型モンゴロイドが、北上を開始。
- 幾つかのグループに分れ、時期を置いて、北上を開始し、当初は、食料確保と寒さを避けるため、海岸線に沿って北上し、海面が下がっていたため陸化していた黄海を当時の海岸線に沿って北上し、シベリア大陸へ向かう。
- シベリア大陸へ向かった人々は、途中で、革新的な石器を開発した。それは、素材の小型・軽量化と槍先に装着する尖頭器など。これにより、植物性食料を補う動物性食料の確保が可能となり、その毛皮を使い防寒具とした。
- 一部のグループはそのまま北上せず、海を渡り琉球・沖縄へ、更に九州から日本へ移住した。



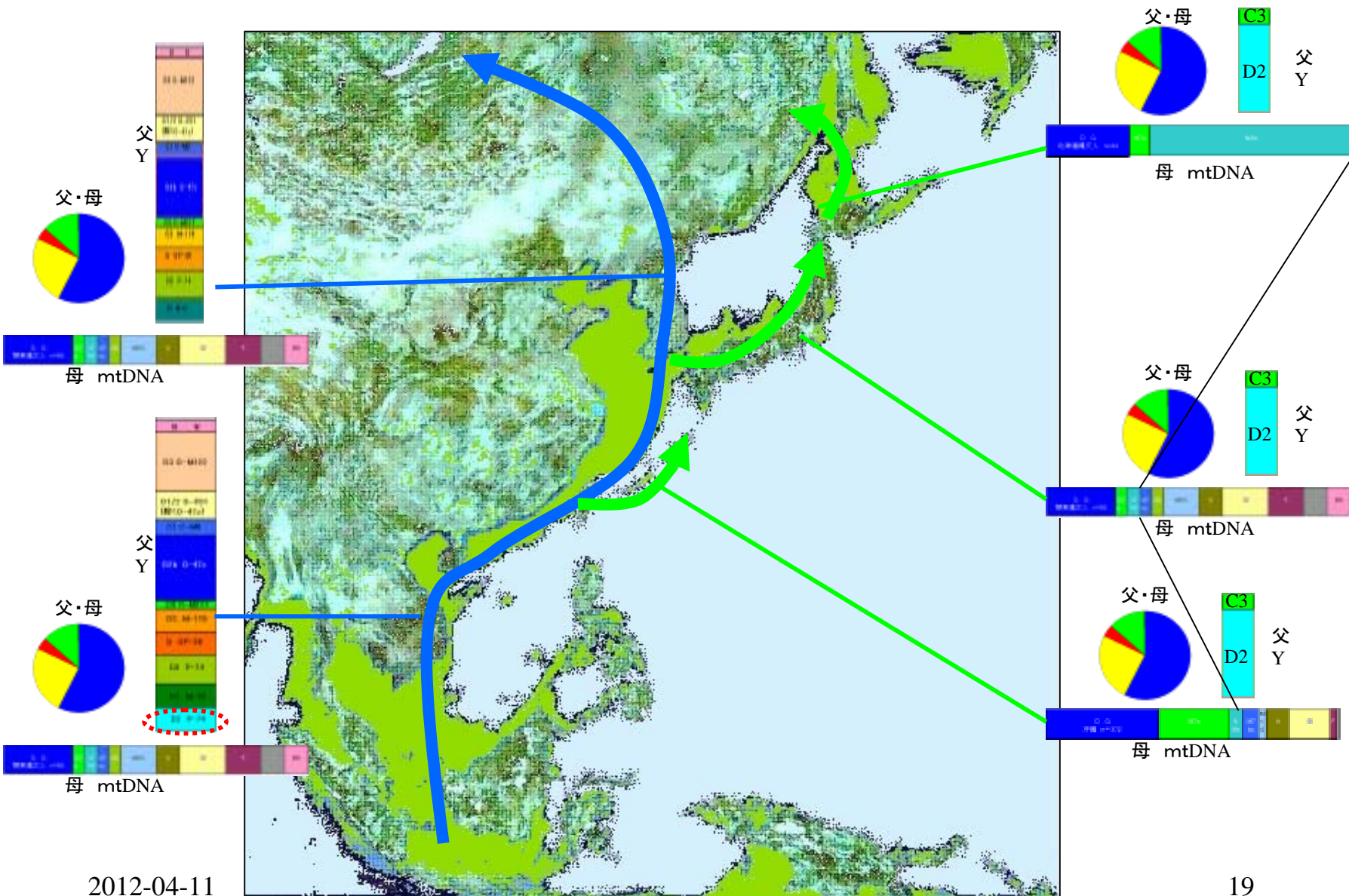
3万5千～3万年前 その②

• スンダ大陸から北上


- 北上開始した中に、舟と渡海技術をもったグループがあった。そのグループは、台湾近辺を越えた処で、東の海の中に、列島を発見し、移住した。そこは、琉球・沖縄の諸島であった。
- 琉球沖縄について
 - 約3万年前は海面が70m程下がっていたため、当時の琉球・沖縄は現在よりもかなり大きい陸地だったことになる。
 - 移住した人々は、広い海岸沿いの地域に居住し、集落を作ったものと推察。
 - 沖縄で、遺跡や古代人の人骨の発見が稀なのは、古代人の生活圏ではない、山間部が、現在の陸地の部分になっているためと思われる。海面下の遺跡に遺物が残されている可能性が高いと推測する。既に、与那国海底遺跡が見つかっている。
 - 琉球・沖縄の古代人は、縄文期の海面上昇で、人口を激減させたと懸念。
- 更に北上をすると、より大きな島(九州)を発見。そのグループの大多数が移住。
 - 九州から、四国、本州と渡り、北へ。
- 津軽海峡は、氷河期も陸地化せず海峡のままだった。グループの中で、舟と渡海技術に長けた少数の人達が渡海し、北海道へ渡った。
 - 北海道へ渡った人達(アイヌ人)のDNA遺伝子は、最初に渡海した沖縄の人達に近い。
 - 宗谷海峡と間宮海峡は、この時期には陸続きで、北海道からシベリヤ北東部まで、そのまま、陸上を移動でき、拡散して行った。
- 渡海せずに、北上を続けたグループは朝鮮半島付近を過ぎ、内陸へ入って行く。食料確保のため、大型哺乳類を捕食するために、狩の道具に改良を加えて行き、石器の革新が行われた。この革新的な石器の技術を生み出した事が、内陸への侵攻が可能となった。
 - 北海道から、樺太・シベリア大陸に来ていたアイヌ族は、この革新的な細石刃石器をもったグループに接し、新しい技術を手にした。その原材料の黒曜石が北海道中央の白滝村で産することを知り、原材料と加工した石器を樺太、シベリヤへ送り出したことが、石器の材料となった黒曜石の解析からルートが判明している。
 - 黒曜石について: 細石刃石器に使われる石は、剥離すると鋭利な切れ刃が取れる黒曜石が使われたが、良質の黒曜石産地は限定されており、その産地から数百キロも離れた地域に運ばれ流通している。北海道の白滝村産の石は、上記の外に本州の青森・秋田に流通した(発掘された)。伊豆神津島産の黒曜石は、海を越え、関東各地や愛知・三重でも縄文遺跡で発掘される。

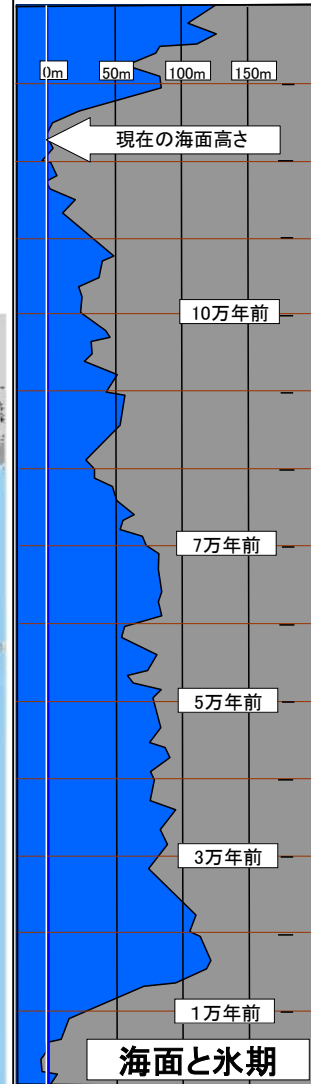
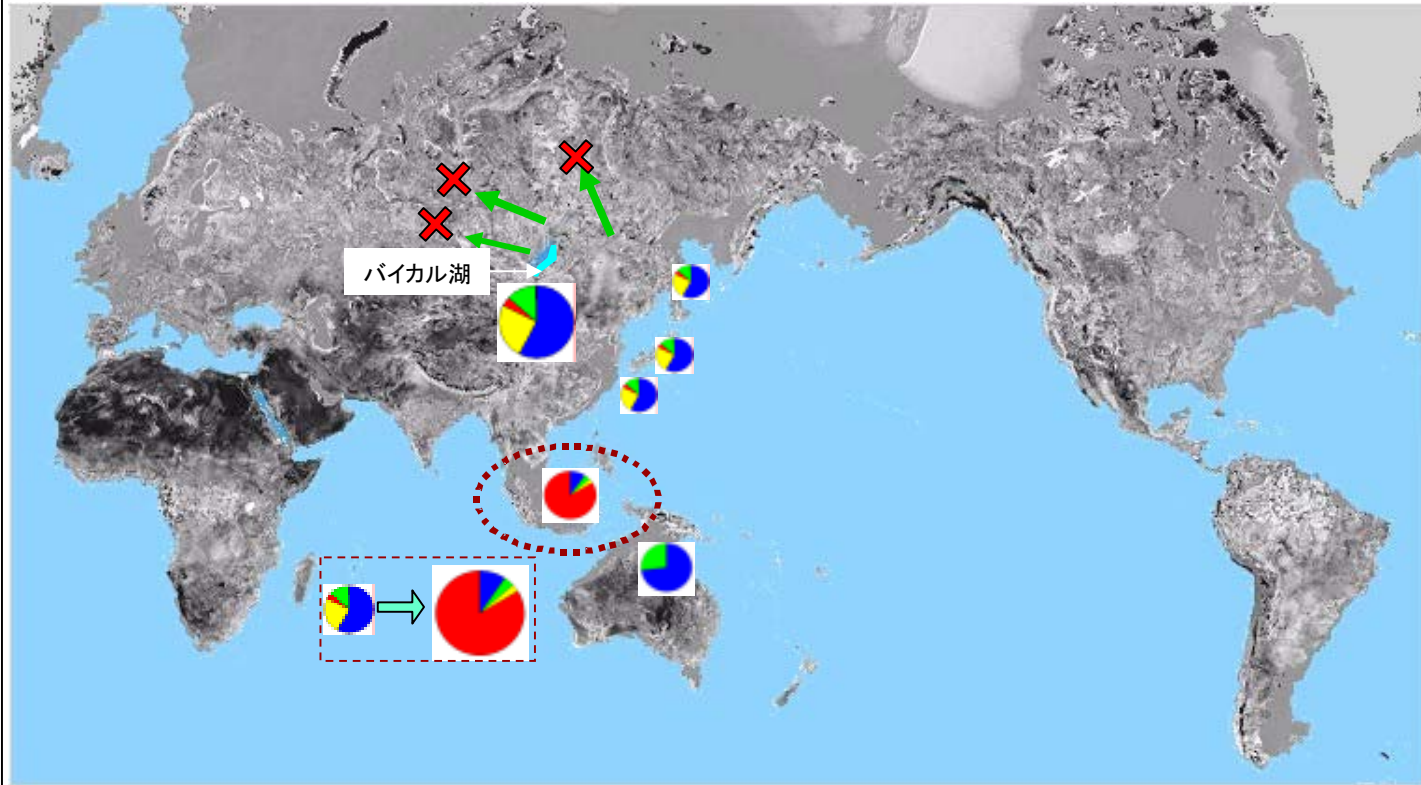


縄文人の遺伝子・父母・Y染色体・mtDNAと大陸・バイカル湖まで到着した人々のDNAの模式



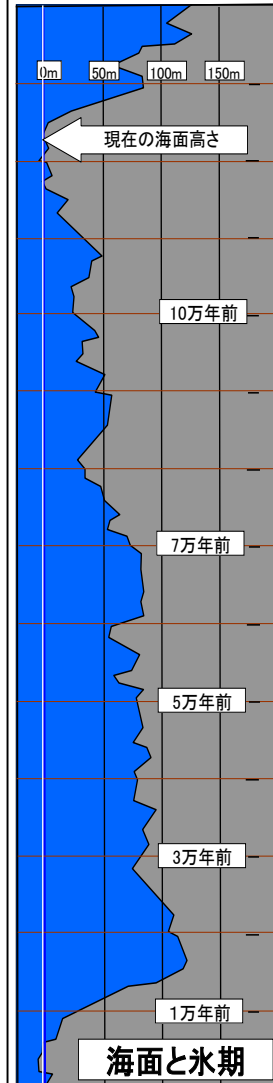
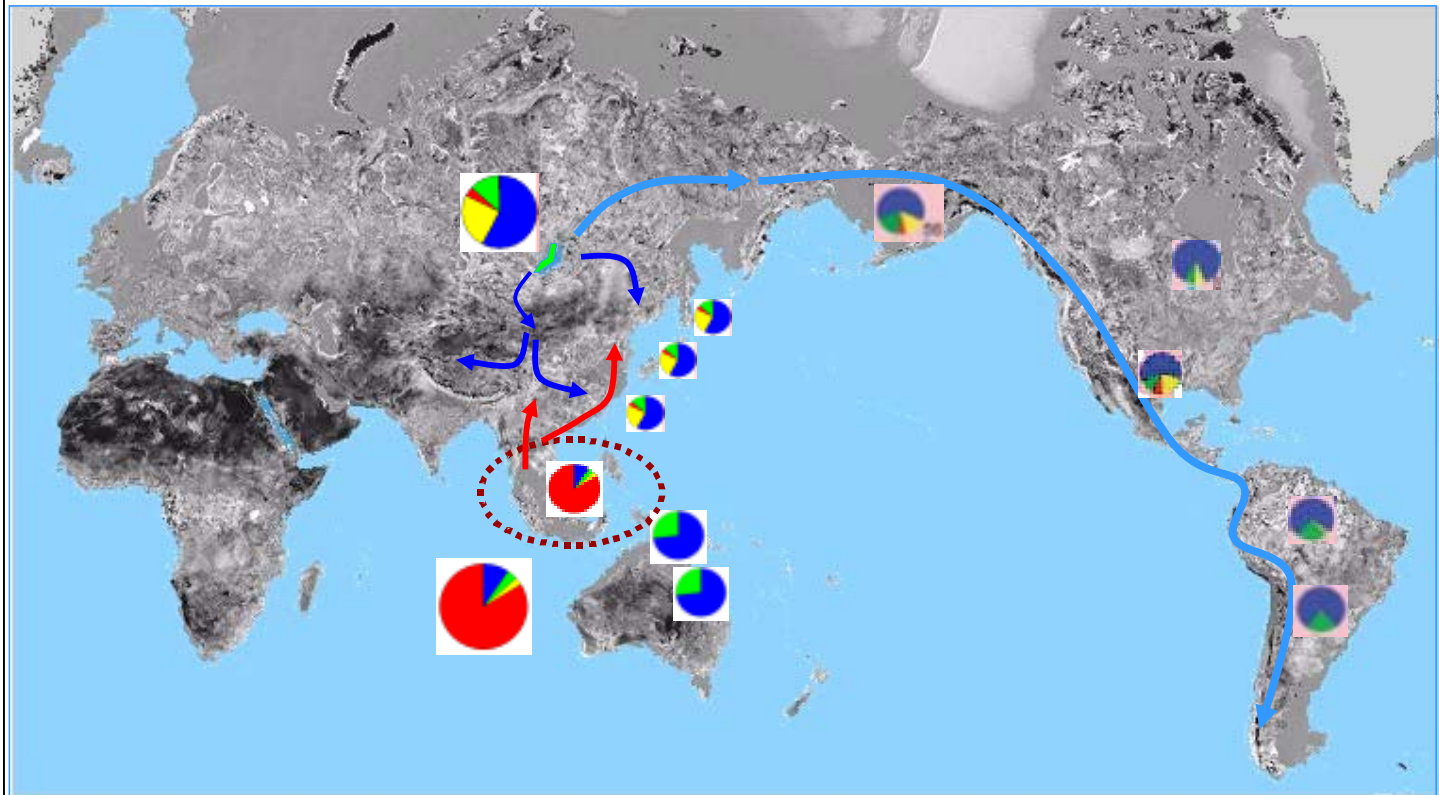
3万～2万年前 厳寒期

- スンダ大陸では
 - グロブリンG(Gm)の標識遺伝子afb1b3とab3stを持つ人達が、古いagとaxgの人達を圧倒し、駆逐していった。
 - この圧倒・駆逐の主な要因は、熱帯性の病原菌に対する対抗力の差であったと推察する。
- シベリア大陸では、食料確保と防寒対策ができたグループ  はシベリア各地へと広がり、生活圏を拡大した。
 - 2万年前、氷河期の寒気が一段と厳しさを増し、各地に広がっていた新人達は、寒さと飢えで絶滅していった。その中で、バイカル湖周辺は比較的温かく、食料となる大型哺乳類—マンモスなどが多く生存したため、その周辺地域に集まってきた人達だけが、生き延びることができた。併し、その代償として、極寒の気候へ対応するための変化が身体におこった。この変化は世代を重ねる毎に顕著になり、長い胴、短い手足、平坦な顔つき(呼吸器への寒気の直入を避ける)になった。北方型モンゴロイドが誕生。

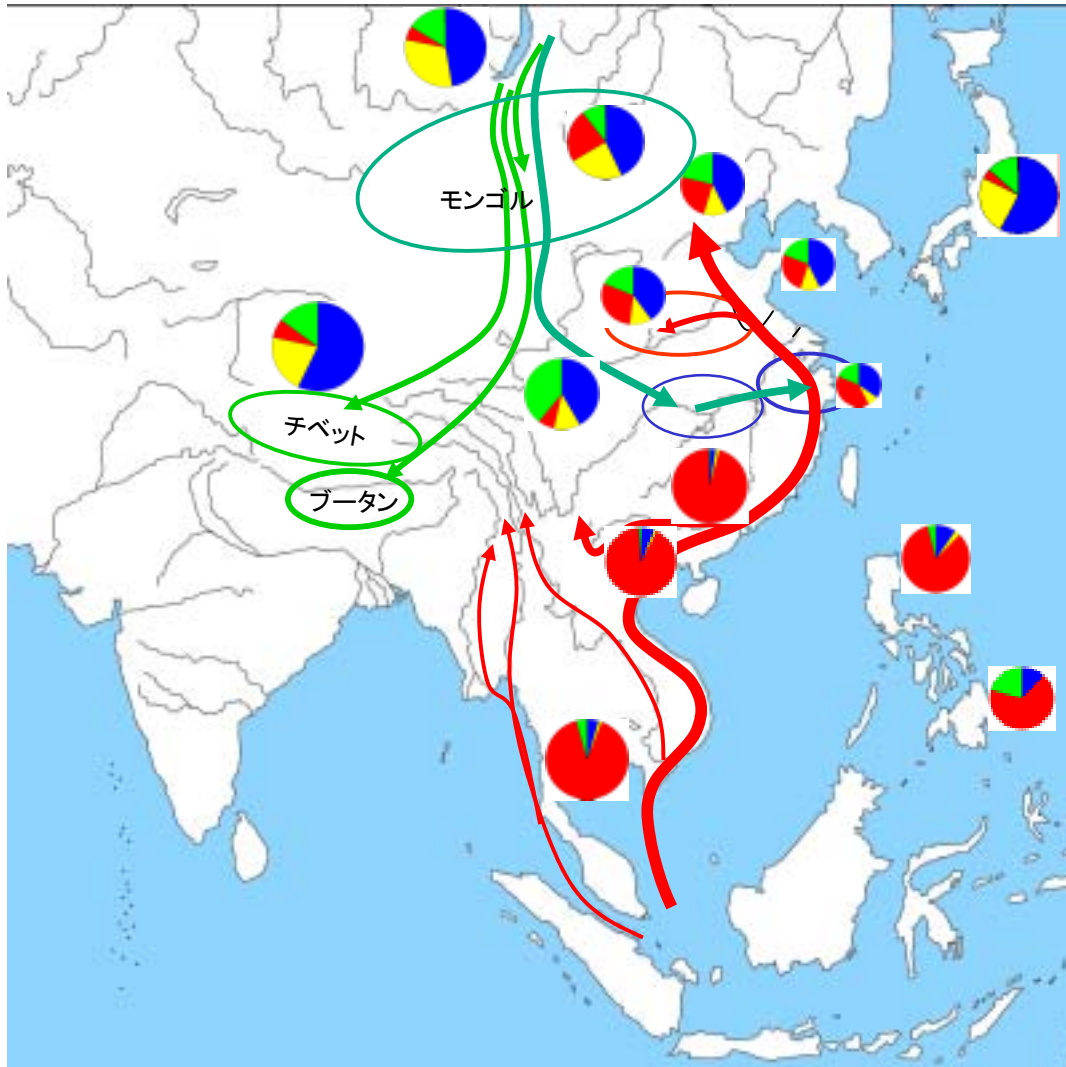


2万～1万年前 やや暖化した時期

- バイカル湖周辺で寒波に耐え、大型哺乳類を捕食する方法を確保し、北方民族となった人達は、東西南北へ移動を開始した。
 - 北へ向かい東に転じたグループは、1万8千年前～1万年前の間にベーリング海峡を越え、アメリカ大陸へ入った。そして、北米でも南米でも、生息していた大型哺乳類を食べつくし、絶滅させながら短期間で南米の先端にまで達した。
 - ベーリング海峡を越え、アメリカ大陸に入ったのは少人数のグループ(家族)で渡ったものと云われている。限られた通婚範囲の中で、遺伝子の多様性を失い、南米に至る人達は、古いagとaxg遺伝子に集約されて行った。
 - 南方へ移動を始めたグループは、高冷なチベット方面や、中国の長江中流域まで移動してきた。
- スンダ大陸では、グループを駆逐し、主役となったグループが、北上を開始した。
 - 海岸沿いを北上し、温暖化する1万年前には中国東北部まで達した。
 - メコン・メナム・サルウェイン・イラワジ河を溯り、中国の雲南や広西壮族自治区などへ拡大した。

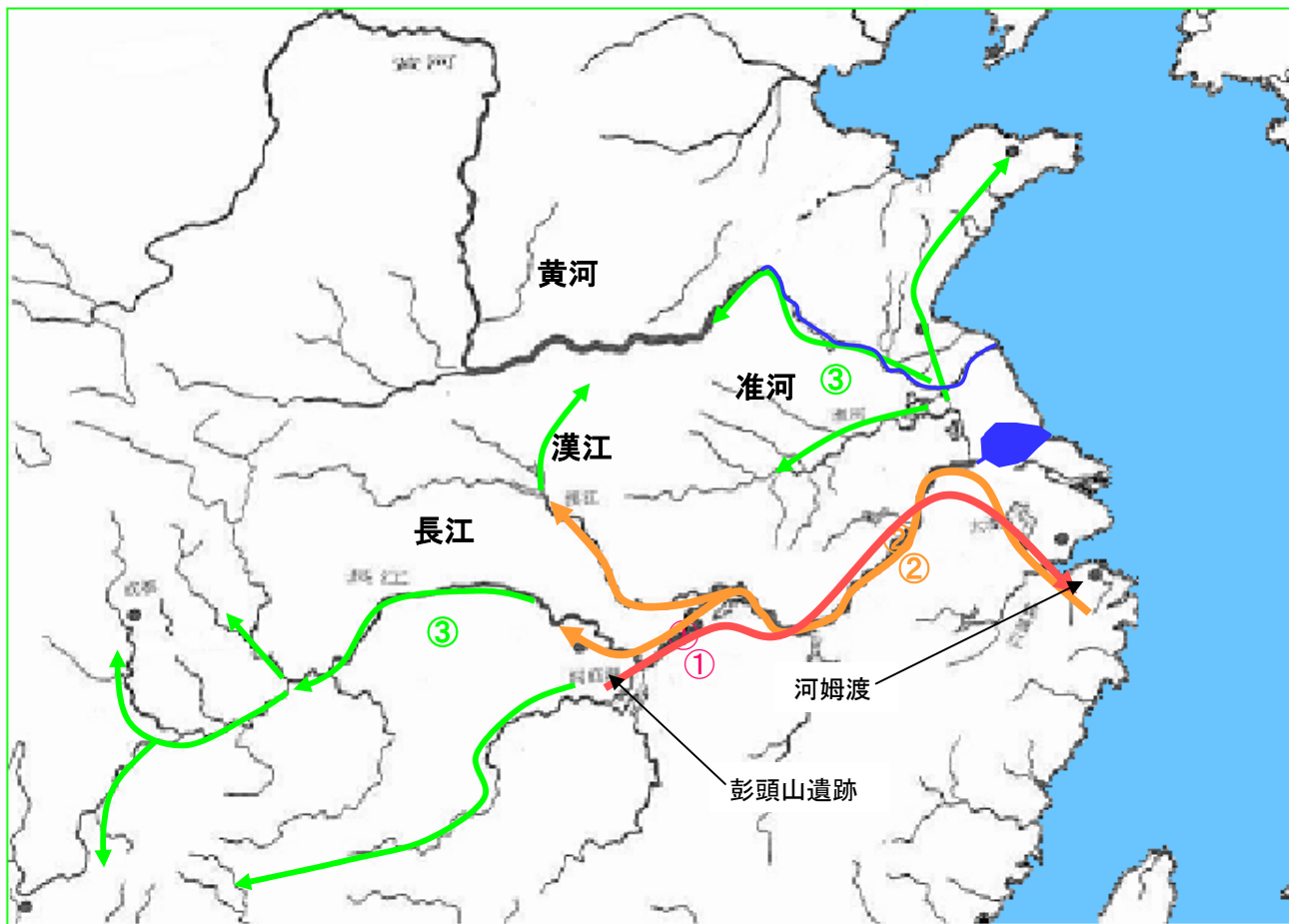


1万年前～5千年前 その①



- スンダ大陸で主役となった新しいモンゴロイドは、温暖化に伴い、北上。
 - インドシナ半島のタイ、ビルマ、ミャンマー、ベトナム、カンボジアに広がり、更に大河を北上し、中国雲南に入った。
 - 東側は中国の貴州、広州に広がり、さらに海岸沿いに北上した。
- バイカル湖で北方型の体躯と変身した初期型モンゴロイドは、南下し、1つのグループは中国の西のチベットに落ち着き、もう一つのグループはブータンに落ち着いた。
 - 初期型モンゴロイドは、男女に関わるGM遺伝子では、4種類のバランスが類似しているが、Y染色体は特異性を持っている。日本人、チベット人とブータン人は、“D”タイプと呼ばれる近い遺伝子を持っている人が多い。Dタイプの中で更に分類すると、日本に残った人では、M57=D2と言うタイプで、日本に特有のもの。チベット人はP47=D3、隣のブータン人はM15=D1。
 - 長江の中流域に達したグループは、1万年前に稲作・米作りを開始。米の生産性の高さは、人口を爆発的に拡大する要因となった。その稲を持って、長江の下流域で、水田耕作が確立し、その水田耕作：稲作とその技術と長江文明が、長江の中流域、から、上流の四川・雲南へ広がり中流域の支流漢江へ。下流域の隣接する流域である淮河と、淮河に流れ込んでいた黄河の流域に広がった。
- 新旧2種のモンゴロイドは、中国では、モザイク模様に、広がり、交流して行ったと推測。

1万年前～5千年前 その② 稲作の発祥と伝播



• かつては、稲と稲作の発祥の地はインドアッサム地方・中国雲南地方と唱えられていたが、その説は完全に否定され、現在は長江が発祥の地と確定した。

• 稲作は、長江中流が最も古く、彭頭山遺跡BC7000年—6000年。
• 次いで長江下流の河姆渡遺跡がBC5200年。

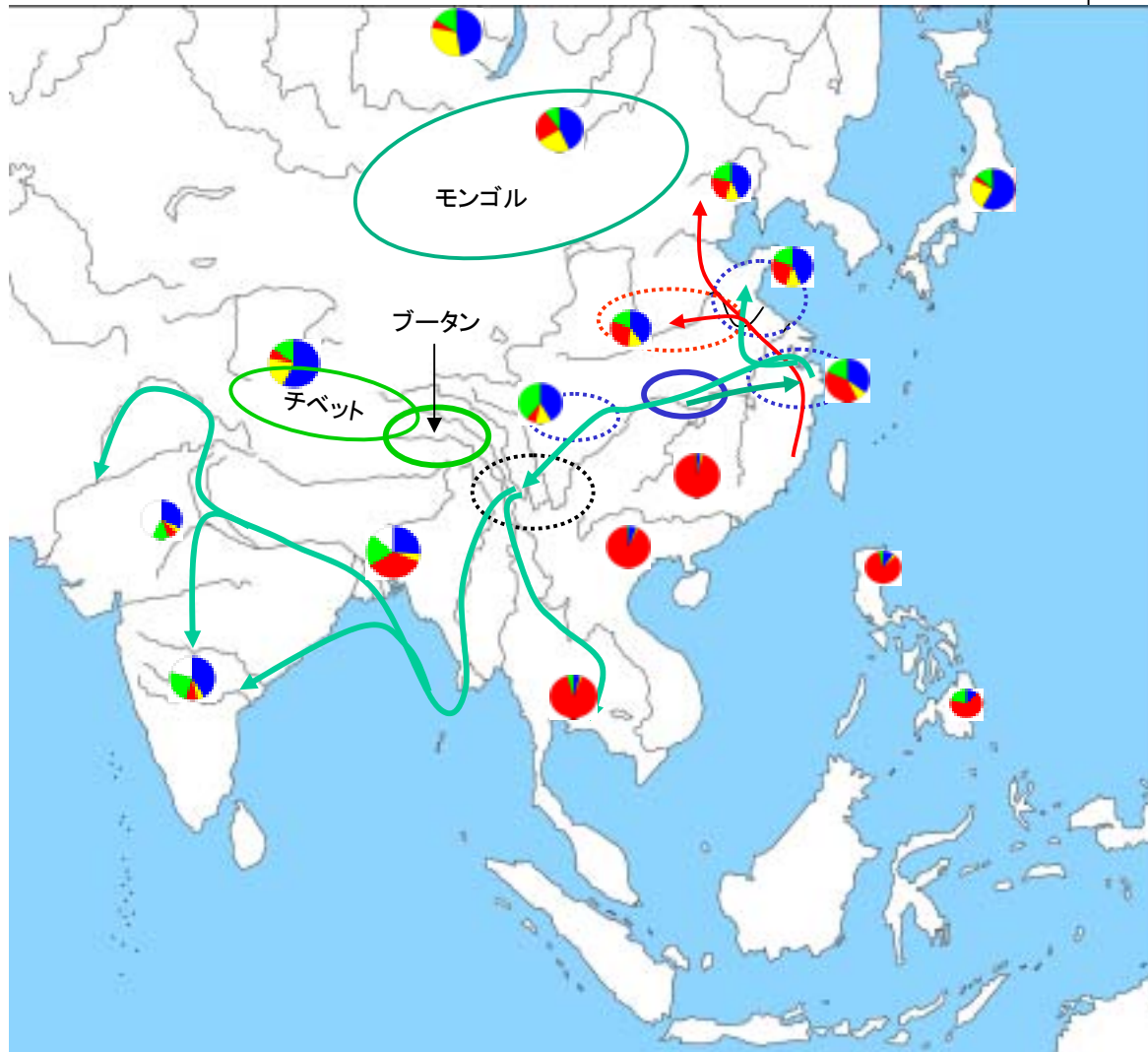
• BC5000—3000の稲作の遺跡は河姆渡のある江南地方と長江の下流と中流域に限られる。

• BC2100年以降、長江の上流や、淮河、黄河中流域に伝播

洪水を引き起こし、問題であった黄河は、紀元前2070—1600年に「夏王朝の創始者の禹」が改修し、現代の流れの北方の川筋に変更した。それ以前は、今の淮河に合流していた。古代の長江の下流と黄河の下流は近接していることに留意。

中国の古代稲・稲作農耕文化に関する遺伝・育種学及び考古学的調査研究 1992年度～1993年度 の図表から
但し、黄河と長江の流れを変更

6~4千年前 激動の時代



中国では、新旧モンゴロイドが多様な民族別れたまま、水田・稲作技術を取得して、適地を求めてモザイク状に広がった。残された適地がなくなると、地域間の紛争が勃発した。

伝説に残される黄帝と、三苗族と蚩尤(しゅう)の中国を南北に別ける大戦争の末に、初期型モンゴロイドと思われる三苗族は、敗退し、徹底的に撲滅された。そのひどさは、新中国の周恩来の宣言によって、悼まれるほどの禍根を中国の歴史に残している。

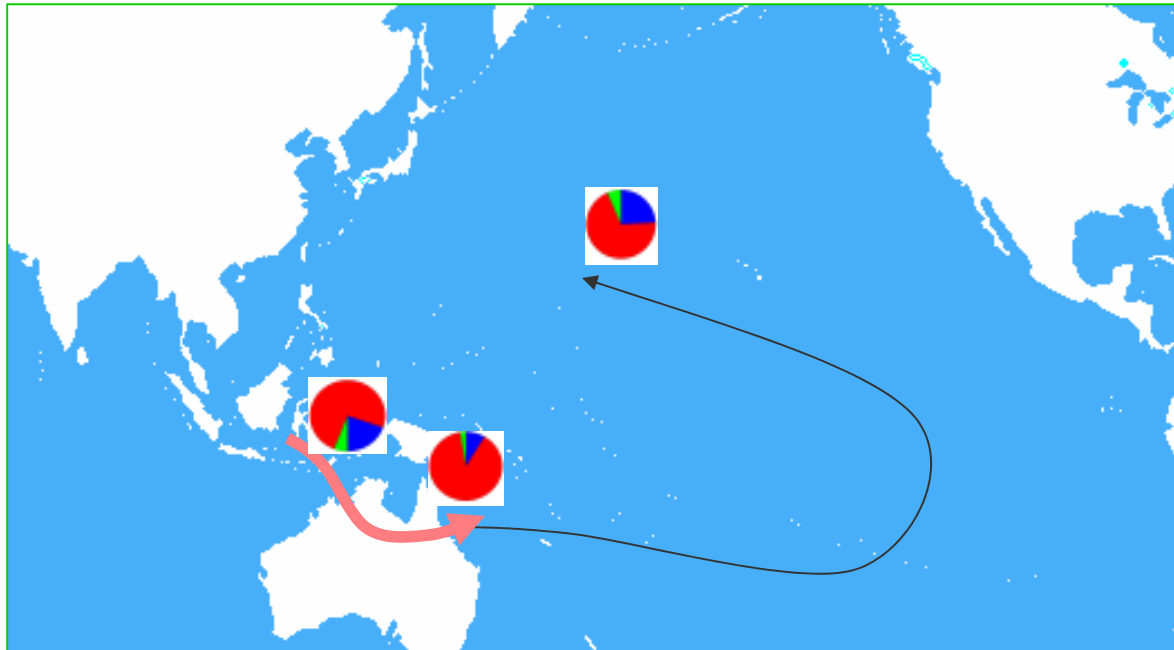
初期型モンゴロイドが主体となった長江文明は、その影響を強く黄河文明に与えながら、戦乱の中で、次第に、追い詰められていった。

その中で、稲作と青銅・鉄器と船の技術を持ったグループが、中国西南の雲南の地から、河を下り、ビルマ・ミャンマーに移り、インドへ渡った。

- インドからパキスタンで水田・稲作を開始し、新たな文明を築いた。ハラッパ・モヘンジョダロで有名なインダス文明。(この文明は水田・稲作文明であったことが近年判明。)
- この文明は、あるとき、徹底的に破壊された。この崩壊をもたらした侵略民族は白人系と考えられる。白色で示されるfb1b3遺伝子は白人系を示す。
- 難を逃れたドラビタ族はインド中央部から南部で、被圧迫民として現在に残る。
- このドラビタ族のY染色体遺伝子の調査結果が手に入らないことが残念。
- タミル人はこのドラビタ族の構成部族。

3600年前 太平洋では

- 3600年前、忽然とニューギニア島の北東に位置する島々に現れたラピタと呼ばれる集団がいる。
 - このラピタは極めて熟達した船舶の技術を持った航海者で、数百年間かけて、ニューカレドニア、フィジー、トンガ、サモアまでの広い海域に広がった。
 - この海域にラピタ人は約1000年間留まり、今から2000年前から新たな拡散を開始し、ポリネシア全体に広がり、南米大陸に近いイースター島からハワイ諸島まで広がった。
 - ラピタ人は、当初は、大型の人ではなかったが、新たな拡散を開始した時は、筋肉マン型の大柄な体型に変化していた。
 - 忽然と現れたラピタ人→ポリネシア人は、言語的には、中国南部起源説が説かれている。
 - モンゴロイドの地球[2]南太平洋との出会い-大塚柳太郎編を参照



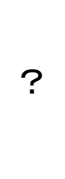
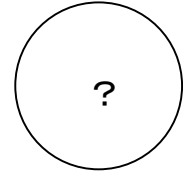
2900年～2100年前 東アジアでは

- 中国の古代:殷(商)王朝から周王朝へ変った時代に長江・淮河の河口地域に居た稲作をベースとした民族が反乱の末、民族滅亡へ追いやられた。滅亡の逃れたその一部が、稲作技術を持って、遼東半島(大嘴子遺跡)を通り、韓国中部(松菊里遺跡)、南部(固城)を経て、北九州の玄界灘沿岸(菜畑・板付)に、移住した。(2900年前から2400年前の期間に)弥生時代の先駆け。
- 中国・周・戦国春秋の時代から秦が中国全土を統一した時に、滅亡の危機に直面していた、民族が、何故か、秦の始皇帝の東方進出の一大プロジェクトに乗って、民族大移動を実行した。近年の中国では、壮大な史実と認められ、日本では、曖昧模糊とした、徐福伝説として省みられていないが、この大移住の時期が、青銅器・鉄器・水田稲作が一気に日本全国に広がった弥生時代の始まりの時期に相応する。

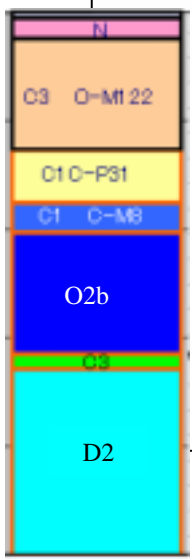
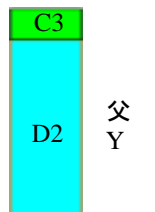
徐福一行は、
全長30mmの大型帆船(ジャンク)
100隻を越える船団を率いて、始皇帝に見送られ、中国・山東半島から出航。主力は有明海から佐賀・筑後川流域に上陸。
その他、太平洋南岸から日本海側の秋田・青森まで。更に一部は済州島から韓国南部へ上陸した。

生活の基盤を築き、先住民の縄文人:アイヌ人を取り込んで、弥生人となり、現生日本人となった。





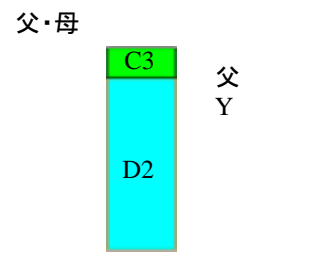
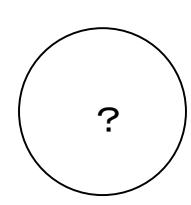
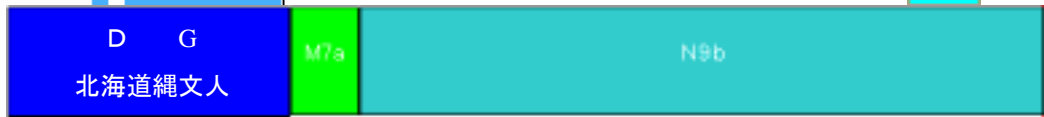
渡来人のDNA ?



← 日本人のみ

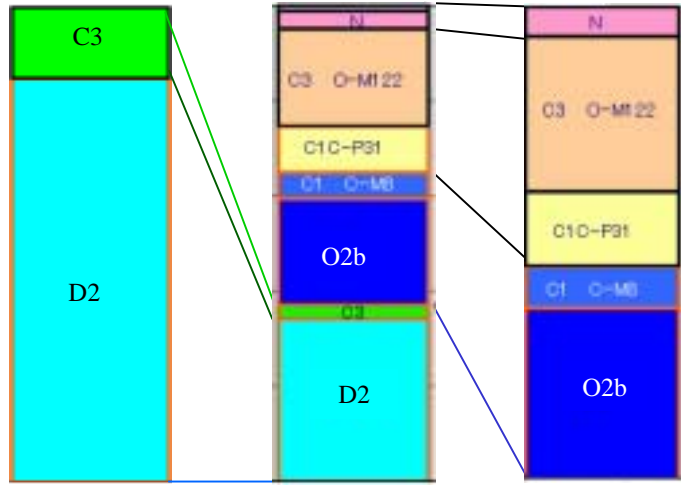
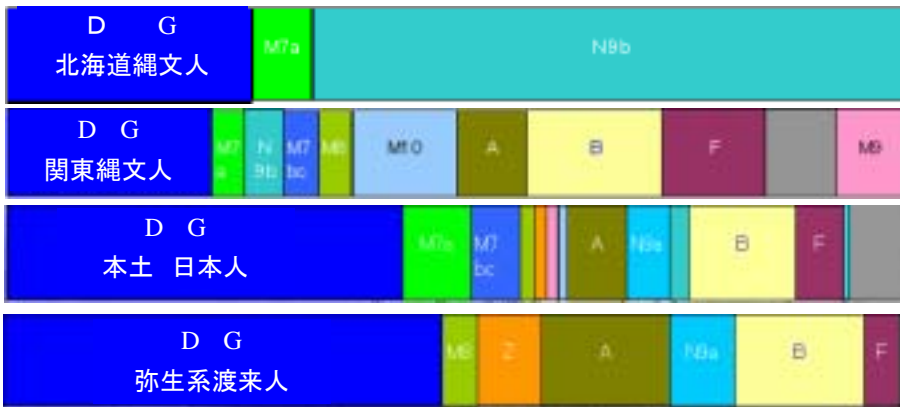
← 日本人のみ

← 日本人のみ



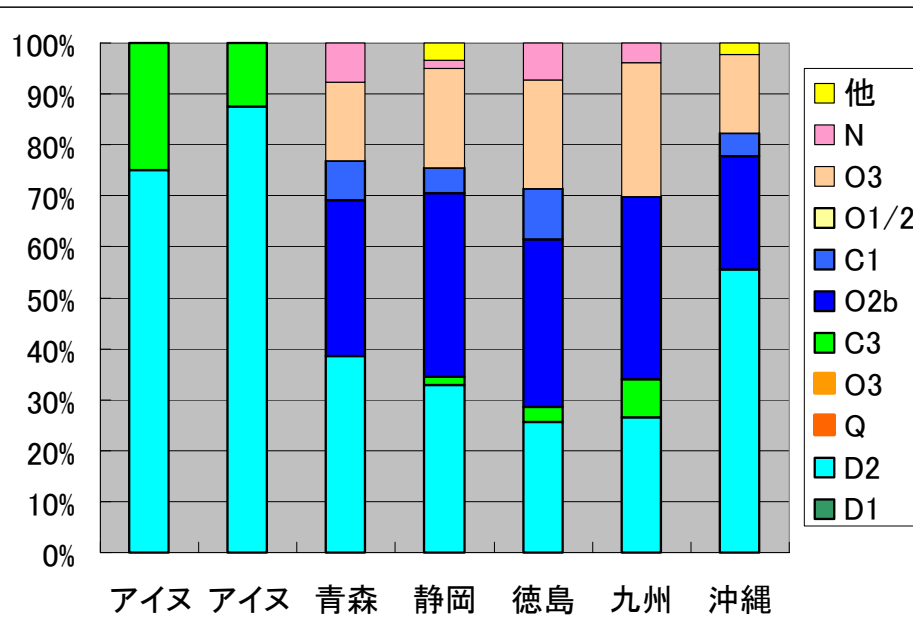
2012-04-11

徐福一行・渡来人の3種のDNA



- 母系のDNA: mtDNAは、発掘された遺骨などから検出できないため、縄文人・渡来人のDNAが直接検出されている。
 - 現在の本土日本人に縄文人と渡来人の双方のDNAが明確に残されている。
 - 多様性に富んだ関東のDNAとほぼ同様のDNAを渡来人も持っている。Z型のみが渡来人に特有。
 - 縄文人と渡来人のmtDNAは、極めて類似している。
- 父方のDNA: Y遺伝子では、遺跡からの埋蔵物からは判定ができず、現代人からしか検出・判定できないため、途中で推論が入る。
 - アイヌ人の遺伝子と本土日本人の間には、際立った違いが有る。
 - アイヌ人の持つ遺伝子D2は、特有のもので、全世界で、日本にしか居ない。
 - 本土日本人の遺伝子の中にも、O2bがやはり特有のもので、韓国に30%見られ、外には、台湾に移住した中国・黄河の南にルーツを持つ数家族のみ。
 - アイヌ+渡来人の混血が、本土日本人とすると、渡来人のY遺伝子の型が推論される。
- 男女・一般のDNA(Gm血液型)も、遺跡・遺骨から検出・判定できない。
 - 本土日本人もアイヌ人・沖縄人が、同じように4要素を持っている。
 - その中で、アイヌ人・沖縄人は、ほぼ同一の比率の4要素を持つため、これを縄文人とする。
 - 又、本土日本人は若干の比率の違いを持つ。
 - Y遺伝子と同様に推論すると、4要素の比率が推定できる。

渡来人の3種のDNAの解釈



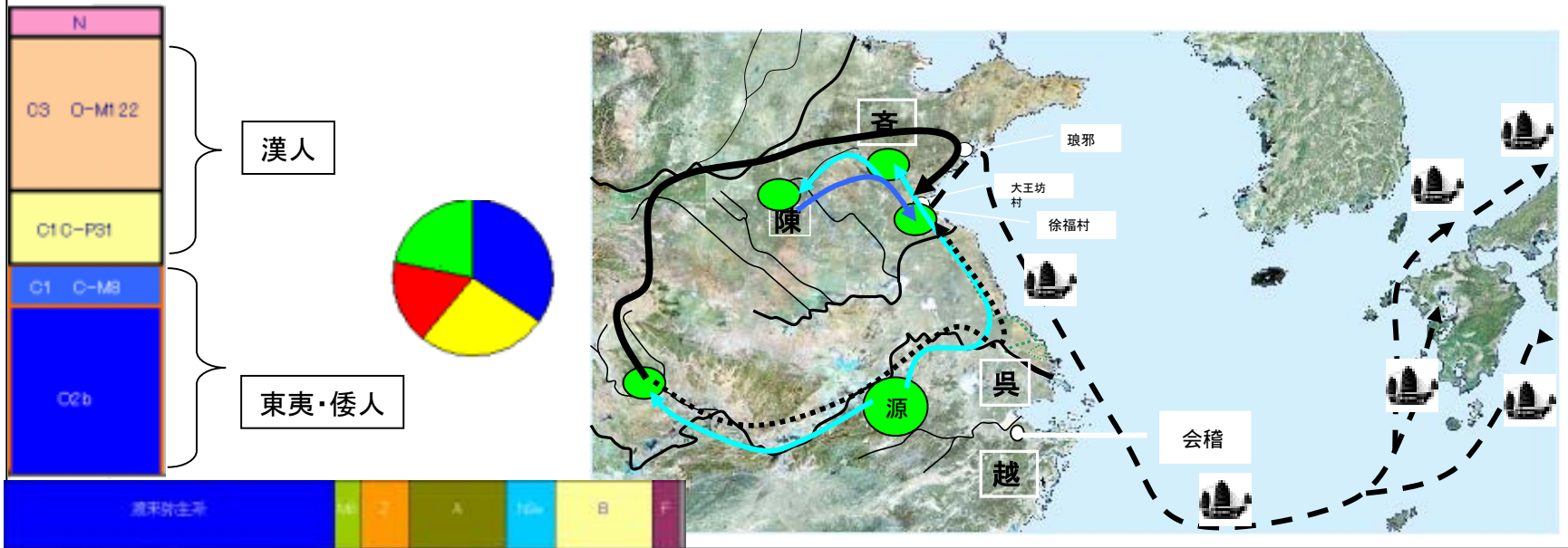
Y染色体の地域別比率

- Y染色体:
 - D2とC3は、日本人特有の遺伝子
 - O2bとC1も、ほぼ日本人に特有。O2bは、僅かに、中国河南に起源を持つ台湾に住む中国人が持ち、韓国人も少数持つ。
 - D2・C3は、古い住民の遺伝子で、O2b・C1は渡来人の遺伝子と考えられる。
 - 尚、O3とNは、中国人(漢人){華北・華南}の主要な遺伝子で、O2b・C1の渡来人と同時に来たか、又は、その後、遣隋使・遣唐使の頃より、長期間にわたり中国から渡来した人の遺伝子と推論。
- 男女・一般のDNA(Gm血液型):
 - 日本の古い住民(アイヌ・沖縄人を含む)の4種の構成要素の比率がほぼ同じで、現生人の構成が、若干赤afb1b3と黄色ab3stの比率が高いことから、渡来人の比率はさらに高かったものと推定。南方からの新モンゴロイドとの混血がやや進んだ状態の集団が渡来したものと推定。

縄文人の母系の未度ミトコンドリアDNAと弥生人(渡来人)のDNAの比率には大きな変化はない。従って、渡来人は、関東地方の縄文人と同じ系統の母系DNAと男女(Gm血液型)のDNAを持ち、Y染色体だけが異なる集団と1/3から1/2の漢人を含む集団が渡来し、古くから住んで人数も多かった縄文人を圧迫しつつ、混血して、現日本人を形成したものと推定される。弥生の時代に渡来した集団は、人数的にも、かなり大きな集団で、土着していた縄文人を凌駕する武力と人口増殖率を支える手段を持っている必要がある。この手段とは、弥生時代に起きた石器から鉄器へのジャンプと水田稲作技術と推定される。

弥生時代を切り開いた渡来人一行

- 弥生時代を切り開いた渡来人一行は、徐福の一行と推定する。この件に関しては、別途記した、「試論・II」「日本語を話す弥生人は何処から来たのか？」を参照下さい。
- 極寒に耐え北方型に変身した旧型のモンゴロイドの一部が、バイカル湖周辺から南下し、長江中流に移住した。そこで稲作を開始した中に、「倭人」が居た。この倭人の1グループは長江の上り四川・雲南に居住した。又1グループは長江を下り、山東半島の付け根に居住した。その一部は、舜と行動し、周の時代に陳に移住。その後、陳から齊に移り住み、田氏と名乗った。
- 秦の始皇帝の軍隊に組み込まれた「倭人」は齊の国で、同胞の徐福に会い、移住プロジェクトに参画。徐福は、全長30mの帆船による大船団を構成し、2度にわたり、日本全土及び一部韓国への大移住プロジェクトを決行した。構成メンバーは、徐福村中心の東夷・倭人、四川・雲南の倭人、更に、同胞である陳から齊に移住していた田氏及び、そのプロジェクトに賛同した漢人、極一部には秦の軍隊を構成していた西方からの白人がいたものと推定する。
- 「倭人」は、母系mtDNAでは、関東縄文人と同じ、多様なDNAを持ち、父系Y遺伝子ではO2bとC1をもち、男女(Gm血液型)DNAでは、4要素を縄文人と同じバランスで持っていたものと推定する。但し、四川・雲南と齊の国に移り住んだ時代に、南方系の新モンゴロイドとの混血があり、若干赤afb1b3と黄色ab3stの比率が高まったものと思われる。

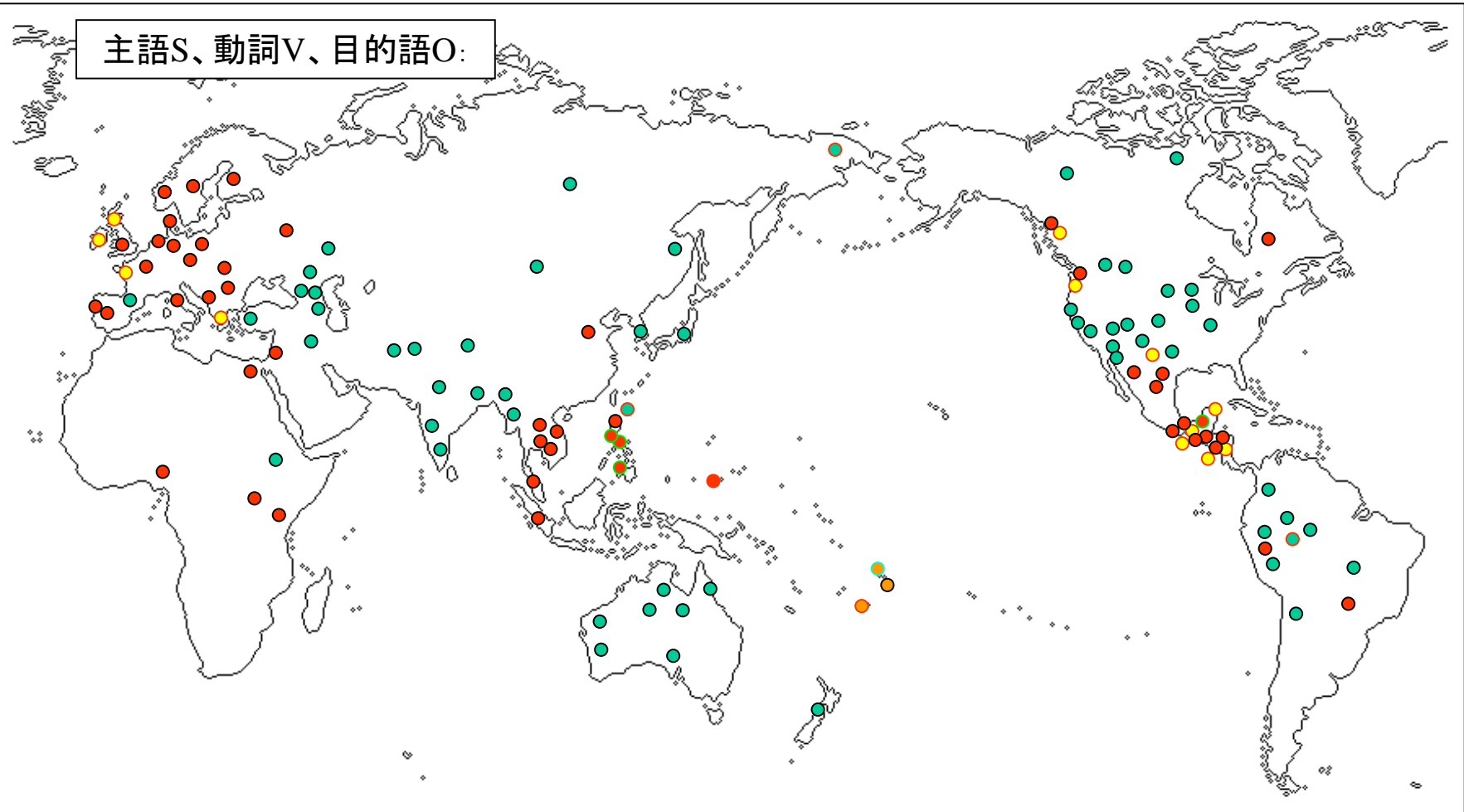


言語の分布図と人類の移動ルート／DNA(男女)

- 世界の共通語となっている英語は、: I saw a deer. の主語・動詞・目的語の語順で、
日本語では: 私は、鹿を、見たと、主語・目的語・動詞の順で、語順が違う。
そう云えば、フランス語もドイツ語も英語と同じ順で、漢文も英語と同じ順。日本語だけが違う。
- 多くの人が、日本語だけが、特殊な語順とってきたが、実は、日本語と同じ語順を持った言語が多く、「日本語は特殊な言語では無い」との書籍が発刊されている。「世界の言語と日本語」副題: 言語類型論から見た日本語 著者の角田太作(東大)
- 日本語の上手なモンゴル出身の相撲力士には、いつも感心するが、実は、モンゴル語は、語順が日本語とほぼ同一で、単語が違うだけとのこと。韓国語の語順も同様で、アイヌ語も同じとのこと。ニューギニアに、日本語と語順に近い言語がある「アルタイ語とオセアニア言語学との接触」江実著との説から、DNAから辿る日本人の起源のルートと語順のから見た言語の分布が一致する可能性を予見した。
- 上記の角田太作氏の著作の付表を地図に照らし、可視化してみると、人類の移動ルートとの関係が判明する。

世界の言語：語順による分布図

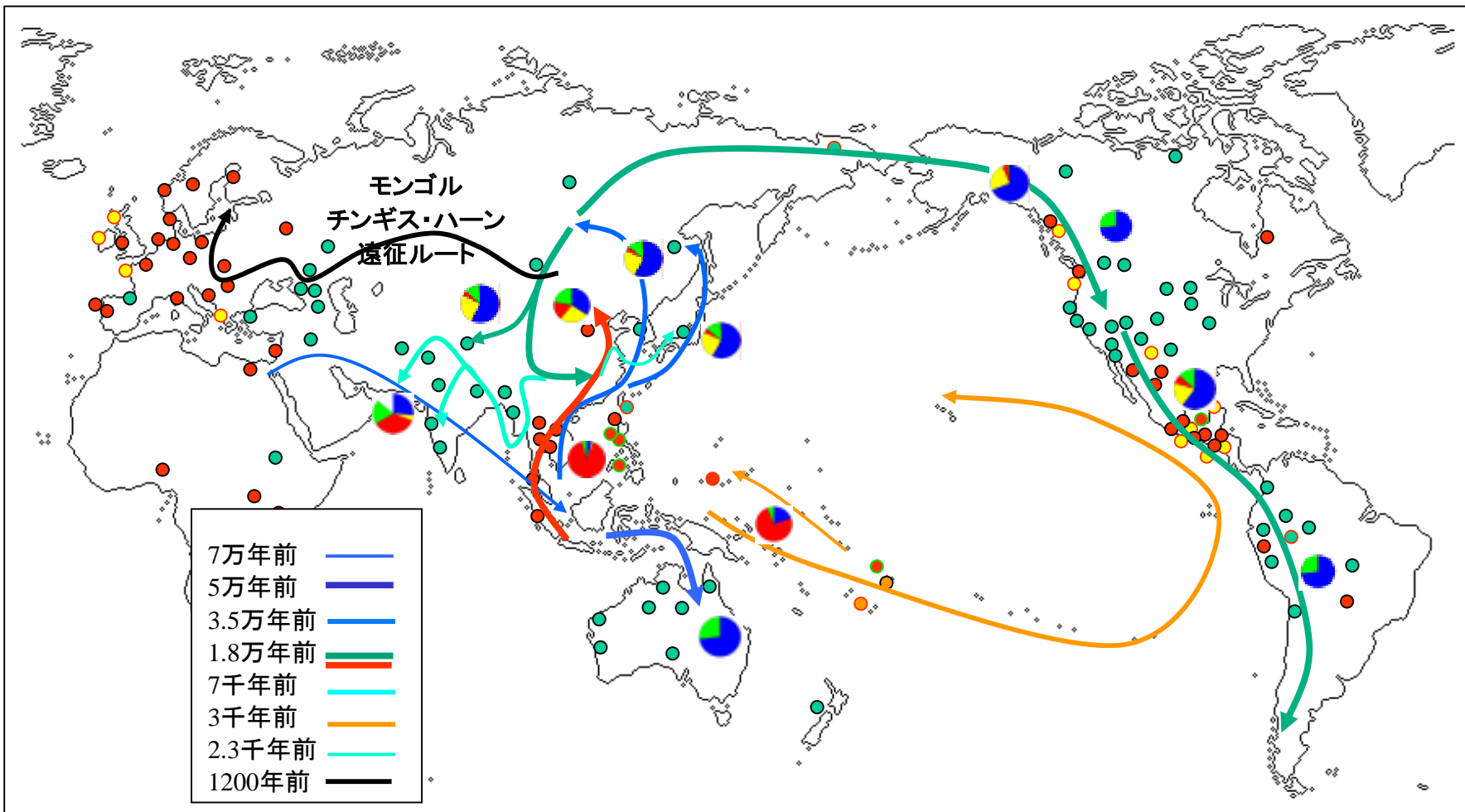
主語S、動詞V、目的語O:



主語S、動詞V、目的語O: ●: SVO ●: SOV ●: VSO等 ●: VSO、OVS等

角田太著作「世界の言語と日本語」言語類型論から見た日本語 に記載された130言語の類型を世界地図上に色分け○記号で示す。

言語の分布図と人類の移動ルート／DNA(男女)



分布図と移動ルートから読み取れること

- 言語の分布地図とルートを重ね合わせると、
 - 最初にスンダ大陸に来て、ニューギニア・オーストラリアに渡った人達の子孫は、日本人と同じ、主語S・目的語O・動詞V:SOVの語順を持つ言語をもっている。
 - スンダ大陸から、3.5万年前に北上をし始めた初期型のモンゴロイド、は、いずれもSOVの語順を持つ。
 - 日本の縄文人→アイヌ、韓国、モンゴル人など
 - 2万年前に耐寒体型になった初期型モンゴロイドが移動したルート上は、SOVの語順を持つ言語が使われている。
 - 南北アメリカ、モンゴル、チベット
 - 更に中国の雲南から南下し、インド大陸に移動したモンゴロイドもSOV型の言語を持つ。
 - 一方、後からスンダ大陸に来た、後期型モンゴロイドは、日本語と異なるSVOの言語系を持って居る。
 - インドネシア、フィリピン、マレーシア、カンボジアなど
 - 更に後期型モンゴロイドの北上した漢民族の言語(中国語)
 - 気になる点
 - 欧州とアジアの境目のグルジアなどは、チングスハンの欧州制覇に関わる結果と思われるが、白人のトルコがSOVで有る点
 - 中米地方のマヤ文明を築いた人達の言語が、周辺と違うSVOで有る点。
- 若干の気になる点はあるが、ほぼ人類の移動ルートと語順で分類する言語は一致している。

まとめ

- 日本人の二重構造が、新しいDNAの解析結果を読み直すことによって、更に明瞭になった。
 - 人類の移動ルートは躍動的で、現代人の想像を上回るものが有った。
- 今回、示したルートに沿って考えると、従来課題・疑問が自然に解消する。
 - 男女のDNA:免疫グロブリンG(Gm)の遺伝子の分布で、解釈の付かないオーストラリア・ニューギニアのアボリジニーの孤立が解消。沖縄の港川人のアボリジニーに類似していることも納得できる。
 - Y染色体のDNA:
 - D2遺伝子は孤立していた訳ではない。同じ黄海沿いを北上したD1・D2・D3の遺伝子グループの内、D2グループが日本に降り、その外は、北上し、バイカル湖まで行き、生き延び、南下し、D1はチベット等に、D3はブータンへ移動したと考え、孤立とはならない。ブータンの着物と日本・アイヌの着物の類似は興味深い。
 - 渡来人のO2bは、家族名・家系の判明した貴重なDNAで、中国古代、神話の時代に、そのルーツを溯ることができ、日本人の由来を考えることが出来る。又、甕棺埋葬や水田稲作から長江文明を担った一族と遡れる。
 - ミトコンドリアDNA: 日本人と共通の母系が、各地にあることが、今回のルートで納得できる。
 - バイカル湖畔と茨城県の発掘人骨の共通の母系の存在
 - アメリカ・インディアンと日本人の共通母系
 - 浦和の縄文人とマレー人・インドネシア人の共通母系 いずれも、移動ルートに存在する。
 - 白血病を引き起こす、ATLウィルスの到達ルートもスンダ大陸からの北上とその後の移動から納得できる。
 - 日本語とタミル語の同一性も、このルートから説明が付き、DNAも男女のGm遺伝子のパターンからも、弥生人と同一の人々が、雲南からミャンマー(ビルマ)からインドへ移住し、水田稲作を広め、居住し、インダス文明を築いていた処を白人系の侵略者に追われ圧迫されたことが、DNAから読み取れる。

結語

日本人は南方から来た初期型モンゴロイドが、黄海沿いに南下し、最初に住み着いた、アイヌ人＝縄文人が一つのグループ。同じく黄海沿いに、日本の近くを通り抜け、シベリア大陸に入り、バイカル湖畔で、耐寒のため体型を変えた北方系モンゴロイドが、暖化後に南下し、長江中流で水田稲作を開始、長江文明を担い、戦乱の続く中、民族滅亡の危機に直面し、秦の始皇帝の助力を得て、民族大移動を行った徐福一行のグループが、日本人の主要な起源。その二つのグループが、約2300年の間に、混血し、現在の日本人となった。

日本語は、アイヌ・縄文人の単語を残しつつ、渡来してきたグループの言語の進化・変遷したもの。言葉は民族と人の根源であるが、1000年の単位では極めて大きく変わるため、大きな概念で辿る必要がある。南インドのタミル語は、日本とインドに分岐する以前に使っていたであろう品物(稲作・衣食住)、身体の名前などで同じ単語が用いられ、五七五の韻を踏む歌などが一致し、且つ、民俗学的風習などが一致し、同一民族と言語が、日本以外にいたことは、なんとも云えぬ安堵を感じる。